Ⅶ　津波体験記

1　児童文「田老村津浪誌」田老小学校編

①　ツナミ

尋一　岩泉亮子

ワタクシガ、ツナミノバンネテヰルト大キナジシンガユレマシタ。ソノ時ワタクシハ、スエサンニショハサッテ外ニデマシタ。ジシンガヤミマシタノデオウチノ中ヘハイッテ、キモノヲキマシタ。

ツナミガクルト外ヘデテニゲナケレバナラヌシ、サムイトオモッテ、エリマキヲシマシタ。

ソシテ、火ヲオコシテアタッテヰルト、オトウサンガ「ナンダカウミガナッテヰルゾ、ミンナ外サデロ山サニゲロ」トサケビマシタ。ワタクシハ、アシダヲハイテハシノトコロマデハセマシタ。ハシノ上デ、スエサンガ「ショハサレ」トイッタノデ、マタスエサンニショハサッテニゲマシタ。ニゲルトキスエセサンハ、ムラカミサンノ、オウチノハウヘ、ハセルノデ、ワタクシハ「ツナミノ時ハ、アカヌマ山サニゲロ」トオバアサンカラキイテヰマシタノデ、スエサンサ「ソッチデハナイ、ソッチデハナイ、アカヌマ山ダ」トイッタラスエサハ、ムラカミサンノハウデナイ、アカヌマ山ヘニゲマシタ。山ヲ、ノボルトキハナンカイモコロビマシタガ、ドコモイタクシマセンデシタ。

山ノ上ニハ、オバアサンダノオトウサンダノオカアサンダノヰマシタ。タツコヤンハ、オバアサンニショハサッテヰマシタ。フヂコハオカアサンニダッコシテ火ニアタッテヰマシタ。ソシテ「ネエチャン」トイッテヰマシタ。ミンナガ「亮チャンヨクタスカッタ」トイヒマシタ。ムツオバサントツヤオバサンハウシロノ山カラオリテキマシタ。

スエサンハ「亮チャンノオカゲデ、タスカッタ」トイヒマシタ。ワタクシハミンナタスカッテオモシロカッタ。

②　大津浪

尋五　前澤盛治

僕は寝て居た。

「ガタ〳〵」と家が動く目をさましてあたりを見た。真暗なので何所も見えない。「いつもの地震では電灯が消えないのに」と思ひました。僕は何か恐しい事が出るかと思ってはね起きて服を着た。

まだ「ガタ〳〵」と家が動く、ます〳〵恐しくなった。一番上の兄さんが寝巻を着たまゝ神棚にあるローソク立に火をつけて持って来た。あたりは急に明るくなった。弟と兄さんが起きないのでねどこの方を見るとまくらごしに僕の方を見てゐた。一番上の兄さんは「こら、皆起きて服を着ろ」と言った。弟と兄さんは、はね起きて服を着た。「服を着たらそのまゝ床の中に入ってろ。」と兄さんはそのまゝ表へ出ていった。まだ「地震」は止まない。

僕たちはとこに入ってないているとあわたゞしく兄さんが表方からかけて来て「盛治盛三、德治、津浪だ山さにげろ」と言った。僕たちは服を着ていたので床から起きるとすぐ靴をはいたり足だをはいたりして三人一しょに表に出た「まさか津浪が」と思ひながら走った。川村さんの橋の所に来ると人が多くさんいた。横をむくと兄さんが見えない。「兄さんに捨てられたな」と思って弟の盛三をひっぱってかけ出した。間もなく郵便局の所に来た。すると弟が石にちまずいてゝころんだ。弟をおこしてひっぱって走ると。「ガラ〳〵〳〵〳〵バリ〳〵〳〵〳〵」とものすごい音がした。その音をきゝつけた所は山のふもとのであった。少し安心したが体がふるへていた。弟を引いて山へ上るのはめんどうだと思って弟を道のいゝ方をやって僕は道でない所を走った。

すると赤沼の人が提灯をつけて「こっちさ、こう〳〵」と言ひながらあるいていた。弟と兄さんが見えなくなった「二人は死んだではないか」と思っていたらおもはづ涙が出た。僕は声を立てゝ泣いた。

泣いてもしかたがないと思って赤沼の人達とお稲荷さんの方へ行っ

た。すると青砂里の方で「助けてくれ〳〵〳〵」と言ふ声が聞えた。今でも津浪話をするとその声が聞えるやうな気がする。ぼうじ山のてっぺんへ行って火にあたりに行くと弟がお寺のおかちやん達と話をしていた。

僕は火にあたった。

兄さんと一番上の兄さんが来たそして「おかちやんおれがこいらがどうをにがさなかったら、盛治達は死んだかもしれない」と言った。

おかちやんは。「なあにがゞさんが居れば盛治がどうは死んだかもしれない」なんて話をしていた。お母さんは東京に行ってゐたのでしだ。

僕は誰も死なゝいので安心した。朝になって弟と兄さんと三人手をつないでおりて来た。墓所の所に来るとはだしの人が多くさんいた。お寺に来て握飯を二つたべた。

間もなくお父さんが中里から来た「お前達はよく助かったなあ」と言って父は涙をためていた。

父はせなかゝら餅をたくさん出してくれた。

たべながら津浪の話を父におしへた。父はなみだをためてきいていた。

③

津　浪

尋五　佐々木　隆

がた〳〵、がた〳〵と、ものすごい地震がしたので僕はむっくりと床の中からはね起きた。表の戸をがらりと明けて外にでると電気はパッと消えた。

おとうさんが家の中で「こら着物を着ないでどこさ行く」と言ったので、私はすぐ家にはいってきものをきたその時おとうさんがろうそくをつけたので家の中は少し明るくなった。

私は弟と二人でつなみが来はしないかと思ったので裏の井戸氷がひけたかどうかを見に行ったがなんのかはりもなかった。私と弟はあまり寒いのでぶる〳〵ふるいながら家の中にはいって火にあたった、その時は電気はついてゐた。お母さんは「ねたいが何だかおそろしくてねる事が出来ない」といって誰もねない。ねえさんがちょっと外をのぞいた時である裏のおしのさんがおおきな声で「大っきい浪音がするはせろ」とさはいで居た。

僕は一番先外にはねぬけた。そしたらみんなが山の方にはせてゐたので僕もはせた。田中のとこまではせたら電気がきえた。僕はせいぱいはせた学校とお寺の分れ道で隣の清さんがはしってゐた。

僕が「おうい」とよぶと、清さんも「おい」とよんだ。そして又はしった。寺の前の石どうの所に上ると道がわからない、どこだり走って行くと高い所にぶつかった。後の方ではバリバリと、家がこはれる音、浪の音が聞える。高い山にはひ上ってはすべり、はひ上ってすべると誰だか上の方からひっぱってくれたのでやっと上る事が出来た。

上ると山に行く道路だったので川向の人だちと、山に上って行った。ありやの方で「たすけろ、〳〵」とさけんでゐる声が聞えた。

山の上まで行つたが、僕の家の者は誰も来ない、死んだかと思ふと、淋しくなって、山を上って馬場野のおぢさんの家へ歩いた。雪が山にはあったので道は分ったが、とても足がつめたかった。歩いたりはせたりして行くと、山でにはとりの声を聞いて馬場野と思った時はうれしかった。馬場野についたのは夜が明ける頃であった。その時消防たちがさはいでゐた。

親類の家に行ったら、どこのか人だかはだしで足を赤くして火にあたつてゐた。僕は此の人も逃げて来た人だなと思った。親類の人は僕を見ると「よく来た早くはいれ」と言ったので、僕は入って飯をもらって食べた、それから火にあたってぬくゝなった。

夜がしっかり明けてから、消防だちや親類の人と田老に来たら町がみんな流されてなくなっていた。

家の下や道路には死んだ人、やけをした人がうん〳〵うなってゐた。僕はたぶん僕の家の人達はみんな死んだと思って探して山の方へ行くと、おとうさんが「隆よく助かった、お前を探してゐた。お前が居るともう家内全部助かった」と言って目になみだをためてゐた。それか

らお父さんについてお母さんや皆の居る山の方へ上って行った。

④

当時の追想

尋六　上花輪聡男

東の空が白んで夜はほのぼのと明けて来ました。救いを呼ぶ声もだん〳〵と少くなりました。

昨晩、いやたった今三、四時間前まで立並んでゐた家が影形もなく。見当の付かない所に家が一軒ぽつんと立ってゐたりしました。

「あれが僕の家だとよいなあお父さんもお母さんも喜ぶだらう」と思ったりしました。

あの荒狂った海も忘れた様にのどかで夜中に燃した焚火はきえそうになってゐました。津浪のとどかぬ所に親類の在る人達は当分親類の家に身をよせる為に村を出て行きます。僕も花輪の親類の家に行きたいと思っていました。

するとお父さんが来て「お前達は花輪に行け」といひました。そしてお父さんは「おれが街道のよい所まで送って行くから」と言ひましたのでお父さんの後にたって熊野神社の坂を下りますとお父さんは「あすこにあるのは死んだ人だからのぼるな」と言ひましたのでよく見ると木とばかり思ってゐたのが死人でした。僕はお父さんは先に来て見てわかってゐたのだなあと感心しました、少し下ると多くさん火を燃して死にそうな人々をかついで来てあてゝ居ました。其の時又一人けが人をかついで来ました。

先から火のそばにゐた一人が「それは子供ではないか」と聞くと「いや〳〵大人だが」と答へました。お父さんは火のそばにいた人に「こっちはいかれないだろうか」と聞くと「行くにいゝでせう」と言ったのでお父さんのあとについて行くと材木などで行くことが出来ずもどって今度は別の方の道路を廻って川のある所まで来ました、僕が川をはねるはづみに背負った子供の重さで転んでしまひました。やう〳〵其処にあった木につかまって立上りました。

僕の転んだ所まで津浪が来た所で上はこほって固かった、其の辺に、かんづめが転んでゐたので拾ったが手がつめたいので投げ捨てた、其の当時は何もいらない気持でした。材木や種々のものであっちにまわったりこっちにまわったりしてお父さんのあとについて行く、三、四時間の間にこんなになったのだと思ふと津浪の恐しさが今さらながら感じられました。材木の下で子豚がブウ〳〵ないてゐた様子もあわれでありました。

道路のよい処へ来ますとお父さんは「此処からお前達は行けるだろうおれは家のトランク等があるか見て行くから」と云って戻ってしまひました。

僕とお母さんとお父さんに別れて花輪へ行く道路を行くと向ふから榊屋のおかみさんが、毛布をかぶって寒そうにして来ました。前おづぼのおぢいさんが「お前さんの家は残っていたっけ」と云ふと榊屋のおかみさんは「どうも〳〵と」繰返してお礼をしました。人は其の人からしてもらはなくともお礼をするのが人情だのだと思ひました。途中初五郎君が笑ひながら「おらあ慶市君の家であたって来た」と言ったので「お前の家のお母さんは初ちんがゐない初ちゃんは死んだこった」と泣いていたっけと話すと「えゝ」と言って走り去りました。

田老村の様子をみに行く人達は僕等にいろ〳〵と様子をきいたり亦なぐさめて呉れて有難かった。越田の大屋の前まで来ると登君のおばあさんが泣きながら「小林の者どもらは死んだこった」と独言を言ひながら僕等の今登って来た道を下りていきました。やうやく花輪の親類の家について戸をがらりと開くと「ほう今来たか」と親類の人達は僕等の来るのをわかってゐた様でした。家へ入ると餅を焼いて呉れましたが食ふ気にはなれません、津浪の話をいろ〳〵して田老がどうして津浪とわかったか聞いたら隣りのおぢいさんが話した。そしておぢいさんは田老に餅を持って下ってゐったと教えて呉れた、其の中にお父さんが来て「家の物は何もかもない」と言って家には上らず直ぐに出て行きました。お父さんの落付かない様子を見て僕も何だか落付きません、親類の子供は僕に本をもって来て「読め々々」とせびるので

読みましたが、目ばかりは本にはいっても心は津浪の事で一杯で駄目でした。親類のおばあさんは「津浪が来ないで在郷も、やっぱりよいなあ」と笑ひました晩になってお父さんと青砂里の伯父さんが来ました外は夜警の消防が騒ぎながらまわて歩いてるらしい眠くなって目をこすってゐるとお父さんは「ねろ」と言ひましたので今晩も津浪がと思ひ着物を着てねるとおぢいさんは「古の津浪でさへ此処へはこないよ」と力づけて呉れました。ろばたを囲んで青砂里のお伯父さんは僕のお父さんに「お前さん達は誰も亡くしないから休んどがんせ、僕は亡くしてゐるのでとてもねむれない」と情けなさそうに言ってゐるのを聞いて僕の家では誰も死なゝいから幸福だとつく〴〵思ひました。

四五日と日数がたっても津浪話はやみませんいつまで津浪話が続くんだろうと云ふ人さへありましたしばらくしてバラックが出来て僕等もバラックに移り夜は足袋などはいたままで寝、小さい地震でも家をとび出す始末、僕は生れて始めてこんな苦しい思ひをしました。一生の思い出になるでせう。亦慰問品を送って呉れた他地方の人達の情けは一生忘れない様心掛けてゐます。

⑤

津浪

尋六　牧野アイ

「ガタ〳〵」とゆれ出しました。

そばに寝てゐたお父さんがとんきゃうな声を上げて「地震だ〳〵」と家の人達を皆起して戸や障子を開けて外に出たが又入って来ました。

けれどもおぢいさんが「なあに起きなくてもいゝ」と言って平気で寝て居ました。

するとだん〳〵地震も止んできました。

お父さんはそれから安心した様子で火をおこしてみんなをあてゝくれました。

丁度体が暖ったころにお父さんが「なあんだおかしい沖がなってきた山ににげろ」と言ひますから私は惣吉を起しました。

お母さんにせんちゃんをそはせて静子と二人で表に出る時おばあさんは火を止めてゐましたしお父さんは「提灯を付けろ〳〵」とさはいでいました。

表に出て見ますと町の人々が何にも言はないでむす〳〵と山の方へ行くので静子あべといったら「やったおらあ父さんといく」といって家に入って行きました。仕方がないから私はだまって家の前に立って居るとそこへ玉澤さんのとし子さんが真青い顔をして来ましたので二人手をとって山の方をさして逃げました。

木村さんのへい垣の所で人が沢山こんでゐたので落合さんの方へ行かうとしたけれども又もどって木村さんのところを人を押し〳〵やうやくのことで山に逃げ登りました。

山に登った時土のやうな物が口に入りましたが私はそんなものには平気で笹にとっゝき〳〵赤沼山のお稲荷さんの所まで行くと、みんながもっと〳〵登って行くので私達も、はなれないやうに、ぎっしり手をとって人の後をついて後山のてっぺんまで上って火をたいてあたりました。

家の事を思ひ出した時は其の時でした。

私は少し落付いて考へた時お父さんは確に生きて居ると思ひました。

冷たい夜がほのぼのと明けたころみんなの家のお父さんお母さん達は自分のうちの子供達を尋ねにくるのに私の家の人に誰も来ませんでした。

すっかり明るくなったので下に行って家の人がどこかに居ると思ってあちこち見ましたが誰も私の家の人が居ると教へてくれないし見当りませんでした。其の時私は始めて一人残ったといふことがわかりました。

私は泣きながらお墓の所まで来て火にあたってゐた人を見たら頭から津浪の水をかぶってぶる〳〵ふるへてゐました。

伯父さんと山こに来た時も小林の人達でけがをしたりお父さんお母さんをなくしたといって泣いてゐた姿を見ては私もだまって居られなくなって一しょに泣きました。

其の晩はいくら寝ようとしても死んだ家の人達を思ひ出して一寸も眠られませんでした。
翌日伯父さん達は死体をさがして来るといって出はって行きました。そのとき私は表で下の方を見下しますと、あっちこっちにごろ〳〵と沢山の死体がありました。
布団を着たまゝ死んでゐる人もあれば裸になって死んでゐる人もありました。
お昼ころになりますと伯父さん達が来ましたから
「何人見付けたべえー」
と聞いたら二人といったからだれ〳〵だかわからなかったので又聞いた、するとお伯父さんは泣きながらお父さんとおぢいさんといって涙を流しました。私からも涙が流れます。母さんや静子はどこに居たのだらうと思ふと、たゞ大声で泣かさりました。
二、三日たって私が外を歩いていたら他の人が静ちゃんがいたっけがといってきかせました。
私は思はず涙が出て来ました。だん〳〵日がたって何時の間にか死体も岡に見えなくなりました。
私がいつも「口ぐせに伯父さんお母さん達は見えないの」と聞くたびに伯父さんは目に涙をためて「お母さん達はたしかに海に行ったろう」と言ふのでした。私はいつも死体が海から上ったという事を聞くと胸がどき〳〵します。私は一人であきらめようと思ってもどうしても、あきらめる事は出来ません。三度々々の食事にもお父さんお母さんのことが思ひ出さして涙が出てきます。
町を通るたびに、家跡に来ると何んだかおっかないやうな気がします。近所の人々はアイちゃん何してお父さんをぴっぱって馳せないやう、といって眼から出てくる涙を袖でふきなから私をなぐさめて下さいます。
私はほんとに独りぼっちの児になったのです。

⑥

津浪

高一　榊　キヨ

突然起った地震に驚いた。
「おや」と思ふ間にひどくゆれ出した。私はどうしたらよいだらうと思った。けれどゞうすることも出来ない私はたゞ神様を念じて「神様どうぞ命ばかりは助けて下さい神様〳〵」と一心にお祈りした、其のうちに電気は消えて地震は次第に止んで来た。
地震は止んだけれども、電気がつかない「もしや火事でも起ったではないか」とあとから〳〵と心配になって来る。家の人達も誰も津浪が来るものと思はなかったと見えて津浪のことは何にも言はないで其のまゝ眠ってしまった。そのうちに電気がついたこれは幸ひと思って私も安心して眠った。すると隣で薪をわる音がした、他の家ではなにやら話声がしてゐる、其の話声を聞くと何だか気にかゝるけれども家の人達は誰一人、何にも言はない私もだまってねてしまった。
少したつと、となりのおかあさんが「津浪だー」と叫んだ、私は其の声をきくや否や、直ぐに跳起きて見るともう誰もいない。私は着物をきたまゝ足袋にひごもかけずにおとうさんの大きなあしだをはいてお山をめがけて一もくさんに走った、途中で電気が消えた、くらさは暗し道は人で一ぱいであった。やうやくのことで山の麓の所まで来ると物凄い音、……ばり〳〵〳〵のう〳〵〳〵此の音を聞いた私は津浪ってこんなに恐しいものだらうか、とびっくりした、そしてもう助かるまいと思った。だが力の及ぶ限り登らうと人にとりすがり木にとっゝいたりして山のなかほどまで来ると小さい弟が、あちこちとさまよって泣いてゐた、弟がこんな所にと思って本当にかわいさうであった。
山へのぼってから家の人達を呼んで尋ねて歩いたすると家内中無事で安心した。
ありやの人の泣きさけぶ声を聞いてはとてもかはいさうでたまらなかった、けれどどうすることも出来ない其の時「火事だー」と叫ぶ声がした。山の下をのぞいて見るとたん屋根の軒下から火があふれる程ぼう〳〵と燃え出した、火の燃えるにしたがって「あゝあつい〳〵

助けろ〳〵」と云ふ悲鳴がして来た。これは波に流されて流れ家の下になった人達である水ぜめ火ぜめ、何とかはいさうな人達であらうと涙は自然と流れて来た。火は益々大きくなって杉についたと思ふとぢり〳〵と音をたてゝ燃える。女の気の弱い人達は「どうしたらよいでせう、どこににげたらばよいでせう」と云ってそこらで泣いてゐる其のうちに夜があけた。

明けて見れは何と云ふことでせう、昨日まではあれ程の町が僅かなうちにこんなに、むざ〳〵と見るかげもない有様となって、泣いても泣いても、泣きゝれないくらゐです、みんながさとへおりて行くので私もおりて見た。おりると間もなく麓の所に流れた人達がこゝかしこでうなってゐる、消防の人達は一生懸命に看護してゐる、体に綿などをまいてやる戸板などで運んでゐる、これを見た私はたゞ涙が出るばかりでした。

私はこんな悲しい思ひをして、兄さんたちと小田代の親類にいってやっかいになることになった。

⑦

津浪

高二　赤沼とし子

三月三日午前二時半頃、家の人達は皆すや〳〵と眠って居る時でした。急にがた〳〵がた〳〵と大きく家がゆれました。私はびっくりして床から起上ったら、お母さんも続いて起きて、子供等を起し着物を着せて居りました。その時は電気はもう消えて居りました。お母さんは色々と注意して、戸を開けたり、何も危くない様にしました。それから間もなく小さい地震が起りました。びっくりした、瞬間電気は又つきました。お母さんは安心した様子で子供等に「電気がついて何も起らないと思ふから、着物を着たまゝで寝ろ」といったので、私も姉さんも子供等も着物を着、襟巻もしたまゝで床の中へ入りました。お母さんは寝ないで家の中を色々と注意して居る様子でした。

少したったら、家のあたりをむす〳〵と人の走る気配です。その為に私は起きて子供達も起し、お母さんと二人外へ出て見ました。お母さんは何回も何回も走る人々に火事だか、何だかを聞きましたけれども、誰も教へないで、たゞむす〳〵して走りました。遠くの方では火事だ〳〵と騒ぐ声が、低くかすかに聞こえました。お母さんは気をもやす様にして、家の中へ入って行きました。

私はその時そばを通る人から「ゆだだ〳〵」とききました。けれども私は其のわけを知らなかったので、ゆっくりと家の中へ入って行って姉さんに言ったら「それは津浪の事だ、お前達は早く逃げろ」といひながら、私に自分のマントを着せました。

それから私はカバンを持って逃げようとした時は、もう子供達は居りませんでした。お母さんは、先生や兄さんを起しに行ったそうでした。

私はマントを着、カバンを持って裏の山へと逃げました。行く途中暗い為に垣根にぶつかって転びました。起き上って後も見ずに又駆けて行ったら、今度は堰へ入って上らうとしても、マントを着たり、カバンを持ったりして居る為に、上る事が容易ではありませんでした。それでマントを脱ぎ捨て、カバン許り持って駆けて行ったら、今度は電信柱の針金にひっかゝって転びました。又起き上って駆けて行きましたが、胸ばかりどき〳〵して、足は中々運ばれませんでした。

山の近くまで行った時、家の人々を考へ出して、何うなって居るだらうと心配になりました。けれども戻ることは出来ませんでした。あっちからもこっちからも泣き叫ぶ声、又誰かを呼ぶ声、遠くの方からは家の壊れる様な、わり〳〵〳〵といふ音が、物凄くかすかに聞えて来ました。山へ上って墓の前まで行ったら、人々が沢山居りました。

私が一番高い所に行くと、多くの人達がたき火をしてあたって居りました。そしてあちこちを見たら八重子と梅子姉さんが、皆と一所に居りました。思はず「ねえさん」と云ったら、私の方を向いて眼には涙を一杯ためながら「誰だと思ったらお前か、よく助かった、お母さん達はどうなったらうなあ」と一人言の様に言ったまゝすゝり泣きをしました。私の眼にも知らず〳〵涙がぼろ〳〵とこぼれて、ふいても〳〵あとから〳〵とこぼれて参りました。

山からお山の方を見ると一面に火が燃えて、その火の中から片方の手を挙げて「助けろー〳〵」と叫んで居るのが見えました。そのかあいさうな事ったら、何とも云はれない程でした。どこの人達も涙をこぼさない人はありませんでした。そうして居るうちに夜は段々明けて参りました。

今まで夜が明けるのを待ちかねて居た私達は、早くすっかり明るくなって呉れゝばよいと思って居ました。其処へ何処かの人が二、三人来たので「お母さん達は何処に居るか知らないの」と聞いたら「お母さんは見ないが姉さんを見た」さういったので八重子と梅子姉さんと三人で、家の人達を探しに行きました。お父さんや兄さんは、お墓の前で火を燃して身体をあたゝめて居りました。それを見たら何となくあはれに思はれて、たゞ涙のごぼれるだけでした。お父さんは流されたそうで、肘の所が少しはれて来て居て大層痛さうでした。身体も随分ぬれて居たので、梅子姉さんはネンネコを着せてやりました又お母さん、姉さん達を山中探したけれども中々見当りませんので、お寺へ行って探しました。それでも見えなくて学校に行ったら多くの人達がみんな学校の中へ土足で入って居りました。私達も中へ入って、あちこち見たけれども居ませんので、火にあたって身体を温めました。そしてたう〳〵お母さんも姉さんも見えませんでした。

其の晩は小田代の家へ私や子供たち許り行ってとまりました。とても静かでたゞ川の流れがさら〳〵と聞こえるだけでした。床についてからは色々な事が考え出されて、中々眠ることが出来ないで、とうとうそのまゝ夜を明して終ひました。朝になって田老に帰り、子供たちとお寺に行ったら兄さんたちが、「なつ子の死がいを見つけたから行く」と言ったので私も連れられて行きました。行って見ると、もう二三歩走れば助かるにいゝ様な所で死んで居りました。身体にはむしろをかけて、その上に板があって「赤沼なつ子」と書いてあったので分かりました。

顔には砂が一ぱいついて、すねは片っぽうだけ血だらけになって傷んで居りました、着物はきちんと着て、身体もあたりまへにきれいになって居りました。私が「姉さん〳〵」と呼んだけれども息は既に出なくなって居たのでした。兄さん達は、ねえさんを板の上に載せてお寺にかつゐで行きました。

私はその日におぢさんと鍬ヶ崎に向ひました。妹の死がいは三日目、お母さんの死がいは四日目に見つけたそうです。とてもかあいさうで、何とも云はれないくらゐだったとの事でした。

2 「北方の児童文集 岩手編」白い国の詩編〔白鴎 4号〕宮古小学校 尋六（第二十六教室）

大津浪

清水ナカ

いつものやうに空を見てねようとしたが、いつもより星がきれいで、ぎらぎらとかがやいてゐた。ぐっすりねていると、がた〳〵とゆれたので、何だらうと思って目をさますと、不意にお父さんが「地震だ、地震だ」といって私たちを起した。そして店の戸をかぎではづして「ちゃんと着物をきろ」といったので着物をきて、マントと帽子を手にとらうとした時、電気がきえてしまった。私は「ぼうし〳〵」とさけぶと、お父さんが懐中電灯をよこした。家がみり〳〵と、こはれさうだ。お父さんが「早く出ろ」といったので、弟ははだしのまゝ外へにげた。そして「げた〳〵」とさけんだので私が長くつを取ってやったら、すぐはいて私にとっゝいてくるので、弟をひっぱってにげた。少したつとおとうさんが店のびんをかこって、外とうをきて私たちのそばへきた。外の人達はたんぜんを着たまゝで、子供をしょったり、風呂しき包をしょったりしてにげてゆく。お父さんが「おばあさんの家へいってくる」といって、はせていったので、私と弟は川のほとりに立ってゐると、みんなが夢中になってお寺の方へ逃げてゆきます。みんなが逃げてゆくのを見るともどかしくて、早くお父さんがくればよいと思ってゐました。どこかの七八才位の女の子供が「かあさん〳〵」と呼

んでゐるのを見て、つれていってくれたかったが、私達もあぶないのでだまってゐた。近所の人達が川の木を見て「これは、よだだ〳〵」といってゐると、向ふの方から「津浪だ〳〵」といふ大声がきこえてきます。所々で泣く声がきこえたり、お母さんが自分の子供をさがしたりしてゐるのもあります。

夜中の三時頃なのでまっくらやみです。やがてお父さんがきて、「津浪がきたから横町の方へにげろ」といったので弟とゆかうとしたら、足がふるへてはせられません。それでもはせようとすると、後からくる人達が私たちをさらけようとします。私と弟ははなれないようにしてゐると、とう〳〵弟が後へゆきました。弟は私を一生けん命よんでゐましたが、こゑが出なくなったのかきこえなくなりました。その時、お父さんが「何があっても手をはなさないでつれてゆけ」といったことが思ひ出されました。私は恐ろしいのも考へず人をかきわけ後へもどって弟をさがしましたが見えないので、もとの橋の所へきて見ると、弟はお父さんに手をとられて、ぶるぶるとふるへて立ってゐました。「正夫々々」といふと、お父さんが「どこへいってきた」といったので「にげていってきた」といふと「正夫もつてれゆけといったのに」といってゐました。私がつれていったが外の人達に押されてはなれたといふと、お父さんは「川を見てゐるから、黒田町の方へ上ってゆけ」といったので、又二人は上へ〳〵と上ってゆきました。弟は私にぎっしりとつついてはなれません。そして「どこへ逃げるや」といったので、「お寺へ」といったら、「早くにげべす」といった。空を見ると風のない晩で雲一つ見えません。

夜が明けはじめました。カラスの声がきこえてきます。

だん〳〵人が帰らうとするので、私は弟へ「かへるか」といったら「おっかないな」といって帰らうとしない。もう津浪はこないだらうといって、みんながかへり出した。

私たちもみんなの帰るあとをついてくると、四方があかるくなってきた。

家へかへったらお父さんはいなかった。二人でおばあさんの家へいって、火を沢山おこしてあたってゐたら、近所の人が「そめや工場がぜんめつだ」といってきました。おばあさんが「だれかケガをなさらないばよいが」といって心配顔をしてゐます。

そめやさんは私の家の親類です。おばあさんが「お前もいって、そめやさんの様子を見てこい」といはれたので、弟と二人で家を出た。その途中で弟の友達や私の友達の陽子さんやツエちゃんと一緒になった。

そめや工場を見たら、何もかも流されて、とても目があてられません。残ったのは機械と蔵だけです。材木が沢山積んであったのが少ししかありません。工場や本宅はどこへいったか影も形もありません。

それから鍬ヶ崎へ行ったら、道路へ大きな船が流されて上がってゐます。家も沢山こはれ、海水でよごれてゐました。

帰りに又もとの道を通ってくると、巡査たちがこはれた家へ紙をはって歩いてゐた。

そこここでしてゐるあはれな話が耳にとまって知らず〳〵涙が頬を伝ってきました。そこを通り抜けたら子供が足袋もはかないでぶる〳〵ふるへてゐるのを見て、私はこの足袋をぬいでやらと思ってゐたら、いつの間にかその子供が人ごみの中にゐなくなりました。

築地まできた時、ごてん山から朝日が上り初めた。私は初めて朝日の上るのを見ました。だん〳〵歩いてくると、ここでも人々がよって津浪話をしてゐるのできいていたら、そこから藤原へゆく宮古橋がこはされて見えます。大きな船が沢山橋の下に上って五十間も橋が真中から二つにされたのでとても藤原へは通れません。流された人々はどうなってゐるか心配でなりません。

家へ帰ってみるとごはんでした。お父さんは「今日はそめやにすけにゆくから学校を早くさがってこい」といひました。

学校へきたらみんなが津浪話です。この辺で最もひどいのは田老（ラウ）で、お寺・役場・学校だけ残って五百戸全部流されて、千人も人が死んだ相です。

その日は一時間でお下りでした。家にくると方々から電報が沢山き

てゐます。お父さんは「ミナブ　ジ」と返事をやりました。
田老のおばさまも死んだ相です。学校では田老へ学用品・古本・慰問金等を沢山やりました。
後から田老にいってきた先生に、全滅の有様や死んでゐた人々のことなどをきかせられて、涙がこぼれてなりませんでした。先生も生徒に慰問金を沢山やって呉れた相です。
八日には宮古へ天子様のおかはりに勅使様が御見舞にお出になり、お金を下さったので有難くておそれおほくなりました。
その時町民は町の両側に並んでうや〳〵しく敬礼をしました。
――綴方倶楽部六月号ニ掲載――　（昭和八・三・一〇作）

註
○たんぜん――寝巻　○よだ――津浪
○田老（タラウ）――地名、宮古カラ船デ約一時間カヽル。三陸第一ノ被害地
○勅使様――大金侍従ノコト

評
綴方倶楽部で千葉先生がとてもくはしく御親切に評をして下さってありますから僕は書きません。
あれをよく読んで考へなければならない事をはっきりして置いて下さい。
自分の感じた気持ちの通り書表はされてゐるかといふことは文で可成大事な問題です。

3　津波の思い出（文集）昭和8年三陸大津波「伝聞ふるさと津波誌（三陸大津波）」田老町教育委員会

①　津波体験（昭和8年3月3日）
上町　鳥居甚平（80歳）

(1)　地震発生

昭和8年3月3日、自分は是非ある都合で宮古市本町の義兄宅に宿泊していた。
3日深夜（時間不明）突然大きな地震を感じた。室内に立っていることが出来ない様な揺れであった。古老の話を思い出し、柱を背にして立ち、揺れが静まるのを待った。地震の揺れは、それまで体験した事のない激しいものであった。
当時の新聞は、あの地震を激震、または烈震と報じていた。（後日、マグニチュード8・2と聞いた）
恐ろしく長い時間であった。程なくして、下の方で人々の騒々しい声がして来た。戸外に出てみると、皆口々に「津波だ！津波だ！」と呼び合いながら、各自が提灯を提げ、或る人は人力車で、（当時は自動車はなかった）若い人は自転車で、常安寺の方向に急いでいるのが見えた。自分は津波の襲来を見るため、みんなと反対方向（宮古川の方向）に歩き出した。
自分はこの時、毎年秋に出稼ぎに来る水産加工場に向かって歩いていた。その加工場は、今の市役所の付近に建っていたが第1波では被害がなく、工場主も川を見ていた。工場主が突然大声で叫んだ。「津波が来る！逃げろ！今度は大きいぞ！」私も川を覗くと、もの凄い早さで宮古橋付近は特に大きな物音がして、漁船が流れ出すのが見えた。
工場主は、早く逃げろと言いながら駆け出した。
自分も逃げ出した。町内には人の気配があまりなかった。自分が今の宮島本店付近に来た時、第2波が山口川を凄い速さで押し上げて行くのが見えた。
波が引いて、工場に戻った時は、工場内に積み上げてあった魚粕150数俵は、1俵も残らず流失していた。

(2)　帰　村

時計がなく時刻は不明であったが、夜明けにはまだ時間があると思われた。田老の役場、郵便局等に電話したが不通。工場主には、「田老はだめだから早く帰れ」と言われ、急ぎ工場を後にした。鍬ヶ崎の裏通りは大小の船や、雑物が打ち上げられて通行も大変であった。
下り坂は走りながら急ぎに急いだ。女遊戸（おなつぺ）を通ったあたりで樫内の人に出会った。その人の話では「津波はたいした事はないようだが火

事が発生した様だ」とのことで詳しい事は不明であった。

松月の手前で、神田自警団班長津田信雄氏と会った。関口村長の宮古警察署長への伝言書を持参しているとのこと、夜明け近かった。そして津田氏は、「大平が倒壊した家屋等のため通れず引き返して吉川登氏宅の裏山を廻り役場へいった」との事であった。更に、津田氏の話によれば、殆どの家は破壊され、死傷者は大変な数の様だ。荒谷方面では火災が発生し今も燃えている」との事であった。

住宅街が一望できるトチノキ山の山頂に立った時は、夜も明け、街の様子がよく見えたが、一望なにも無く、人影も見えなかった。田老村は全滅と思い、その場にしばらく立ちつくしていた。

眼下に見える湾内は、波は静かだが一面に浮流物が浮かんでいるのが見えた。波打ち際には倒壊した家屋が一面に打ち上げられているのが見えた。驚いて山を一気に駆け下り、家族の安否を気遣い我家の跡に立った。一物も無い。

ここまで来るまでも多くの死者を見た。また負傷して寒さに震え助けを求めている人、倒れた家の下敷きになり無惨な姿の死者、いずれを見ても此の世のものとは思われない悲惨な姿だった。

お寺の前や、付近の道路は、怪我人や遺体が横たわり、怪我をした人は傷の痛さを訴え、或る人は水を、食物を求めて叫んだり、肉親の名を呼ぶ人、飢えと寒さのため力尽きて水を口にしながら死んで行く人もあった。

この様な冷酷非情な惨状は、今でも、あの場に立てばはっきりと瞼に見えて来る。

午後になり、寒さは厳しくなるばかりだった。午後3時頃からは牡丹雪が降り出した。引取人のない死者には一枚の筵がかけられ、その上に雪が積もっていた。

通信施設の破壊のため、救援活動も行き届かない有様だった。この様な冷酷非情の場から、自分もまた、肉親を求めて立ち去った午後であった。

合掌

⑶ 奇跡の人

午後、家族の行方を尋ねて前須賀に出て見た。釜屋の波打ち際に座っている人を見付け近づいて見ると伊藤氏で、着衣は全部濡れていたが元気だった。しかし立つ事が出来ない様子で声をかけると、空腹を訴え、食べ物を求めた。

自分は何も持っていなかったので、何か見付けて戻るからと励ましてその場を去った。

荒野の中で3人に出会った。樫内の人達で事情を話して、伊藤氏のいる場所へ案内した。3人は直ちに伊藤氏の着衣を刃物で切り裂いて脱がせ、自分達が着ていた衣服を脱いで着せ替えてやり背負って、あの釜屋の坂を登り部落の方へといった。その後を見送りながら無事に助かる事を祈ってその場を去った。

前須賀の波打ち際に打ち上げられた、家屋等を覗いて見ながら歩いていたら、透き間から絣の着物を着た男の子が見えた。その時は生死が不明であったが、声をかけると泣き出し怪我もないようだった。どこの誰かと聞いても返事がない。牡丹雪が降り出して来た。

其の場から子どもを背負って役場に向かった。途中、焚火を囲んでいた3、4人に背中の子どもを尋ねると、1人の老人が「ア！俺の孫だ！」と名前を呼ぶと、子どもは声高く泣き出した。5歳の佐々木基君と判明した。

この人は長じて、遠洋漁業の組合員になり、大いに働いていると聞いて、誠に奇跡的な2人であった。

（飢えに耐えかねて）

午後4時過ぎ頃、空腹に耐えかねて小学校の方へ歩いて行くと、校庭の隅の方で4、5人が焚火を囲んで座っていた。自分も仲間入りして座ったが、みんな無言だった。

誰かが言った。「腹が減った」と。それからしばらくして網袋に入った干し餅が持ち込まれた。見れば全部砂にくるまっていた。其の餅を小川で洗い焼いて食う事にした。しばらくして、塩鮭、死んだ豚の肉等が持ち込まれ、火に投げ入れて焼いて食った。これが3月3日の1日分の食糧であった。

あたりが夕闇迫る頃、小学校の講堂に入った。誰も一言も言わず寒い夜を過ごしたが、朝まで眠れない人もあった。

(4) 海の生物の異常な行動について

昭和8年1月中旬頃、宮古閉伊川河口付近に時ならぬ鰯の異常な行動が見られた。

其の日は風もなく好天で静かな日であった。

午後1時頃のこと、鰯の大群が押し寄せて、河口から藤原前あたりまでの波打ち際に大量の鰯が打ち上がった。

1月中旬といえば、宮古湾での鰯漁は毎年終漁している時期である。

この異常を見た人達は、口々に津波来襲の前触れではないか等言い合っていた。当時の古老も、今まで見た事も聞いた事もない現象で、何か悪い事が起きる前兆ではないかと心配顔で話していたのが記憶にある。

②

津波の逃避体験

下町　吉水義夫（72歳）

寒い雪の降る夜などは、炉端で祖母は水に漬けて凍ったじゃがいもの皮むきをしながら昔話をしてくれるのだった。

油断できない。津波はまたいつかくる。地震がゆったら、赤沼山へ逃げろと教えてくれた。大正の終り頃の話になる。祖母が言うことは、赤沼山は低いようだが、寝ている牛なのだから、津波がくると立ちあがって高くなると教えてくれたが後に大館山がある。

「ねうし」だと話していたが。

井戸の水、川の水も引いてゆくとも教えてくれた。明治の津波を田老での体験はない。生まれが藤原だったので藤原は津波は安全地帯と言い伝えがあったとか。

閉伊川の津波の模様を話していた。

祖父は沖の漁に出て、朝かえったら、家も妻も流されておった。大きな地震がなくとも29年の明治の津波はきていると教えられたが、昭和8年の津波では、浜へ漁にさがった漁師の人達が潮の引く異常をみて「水がひけた、水がひけた」と叫んで、浜より逃げてくるその声に驚き津波だと直感、赤沼山に逃げた。

祖母の教えと漁師の人々の知らせで、命が助かったと思っている。

津波の避難は日頃の津波に対する注意と、襲来時の通報の2点が人的被害を防ぐものと8年の津波体験より得たのだった。

私は新聞少年だったので、赤沼山への避難道路は津波のくる前の晩も歩いていたが、避難場所、避難道路は常によく見ておくことが大切である。避難する時駐在所の処まで電灯がついていた。赤沼山に入ってから爆風（暴カ）と同時に真っ暗闇になったが、その時、青白い光が前方を照らして、本道路をゆかず、山の斜面の薪の切り株に取りすがって、高台にのぼったが、後になって、お会いした地震学の今村博士も、津波の際ある発光現象だと話されたが、あの光のおかげで廻り道しないで真っ直に高台にあがることができた救いの光でもあった。廻り道をした人々の大半は浪にさらわれてしまった。

③

思い出

中荒谷　中島友吉（74歳）

今から57年前の思い出をと云われても、切れ切れの思い出で後から続いてこないので困る。

俺が考えるに、津波が来るとき、その人の現在地に依って、見方、感じ方が違うと思っている。

俺が津波に遭った時は17歳で、家は乙部で現在の保育所から南方60米くらいの所に在って、子ども当時から後山（うしろ）は我が家の庭の様なもので、夜だって何の心配もなく登ったり下りたり自由だった。

また、前年亡くなった父親が、明治29年の大津波の時15歳で、1人で後山へ登って助かったこと等聞かされていた。

その時は、旧暦の5月5日の端午で、現在の入梅期で海には霧（ガス）が掛かって静かな晩だったそうで、親父（私の父親）は八丁櫓をつけたや

や大きめの船で、若者5、6人で鮪の刺し網に沖へ出て留守で、母親と妹と3人で端午の節句を祝っていたとの事です。

大地震が始まって3人で外にとび出ると、沖の方からドドドドドン！ドドドドドン！と3回ばかり鳴音（なりおと）が聞こえた。（時間不明）その後、家の内に入っていたら、須賀（浜）の方から、津波だ！津波だ！逃げろ！逃げろ！と声が聞こえたので、3人で後山へ逃げたとのことで、15歳の少年1人だけ助かって母と妹の姿は無かったとのこと。その時から俺の親父は、88歳の米寿で亡くなるまで母や妹はなかった。重津部や鍬ヶ崎の親類にお世話になったという。

昭和の津波は3月3日だが、あれも旧暦では1月末から2月の始めで、とても寒い朝だった。あの晩は、俺の家には在（ざい）の方から大人のお客様が2人あったから、多分小正月気分だったと思う。

豆電球は灯っていたが、時計は見えなかった。小便が溜まっても寒くて起きないでいた。

突然、地鳴りと共に横揺れか、縦揺れが激しい地震で、立っても手ばなしで歩くことは出来なかった。

その後、揺れもしばらくして静まった。俺や、お客様も床の内に入ったが眠られない。父母は玄関で、何やらゴソゴソ静かに話し合っている様子だった。（他家では、焚火をしてあたった家もあると聞いた）

その少し後で、また揺り返しが来た。これが来れば、きっと津波が来ると親父がいった事を忘れない。

寝床がやや温まった頃、親父が大声で「津波だ！うんながどう（お前達）逃げろ！」と叫んでくれたことははっきり覚えている。

素足で、丹前のままだったその頃は、道路以外はみんな柵が結ってあったが、飛び越え、乗り越え、後の山に登った。その頃からビリビリビリ！ガラガラガラ！と家が壊れる音が凄く腹の底まで響く。

また、夜ではっきり見えないが、白く高い波頭（がしら）が見えたと思って居る。あと追いかけられて羽尾（はげ）がとんでる様に体が軽かった。

白い高い浪が来る前に強い風が出る。その風で家等が壊されとばされる。俺の友達で一級先輩は、釜石の三貫島の建網に行く事で、前の日に行季一杯着替えを入れていた。それを担いで逃げ、浪はとどかなかったが中花保の倒れた家の下になっていた。空身（からみ）なら充分逃げられたと思って残念に思う。

須賀（浜）では、あの時刻には毎朝、目抜漁に出る船が乗船中で、また、船に乗らなかった人達は、青砂里の高台に登って助かっている。逃げる途中で、田老川には水が無かったという。

船に早く乗る船頭さんや機関長さんは、船と共に八幡神社の裾あたりに打ち上げられていた。

田老港の地形を見る時、津波が北方からでも、南方からでも大浪は先ず大平方面に進み、その後、町内、荒谷方面とまわって、長内川から流失物を引き出して行く様に思われる。その朝、出羽神社の山裾から発生した火災も町内方面から来た流失家材で、その中に多数の生存者もいたと聞く。

大浪が引いた夜明け前から、提灯をつけた人々が、家族を探して名を呼ぶ声が今も耳の底から聞こえて来る様だ。

俺は後山の峠まで登っていた。夜明けとなって、次第に下山して上乙部の観音堂まで下がる。本家や2つの分家も共に無事でみんなでよろこんだことを思い出し。

○3月3日の句　二首

おひなさま
せっかくきたのに
しでのたび

かまこやき
やくこもとられ
あともなく

④

「忘れられない昭和8年3月3日」

川向　堀江イ子（66歳）

昭和8年3月3日、私は東和町土沢尋常小学校4年生でした。
まだ暗い寒い朝、強い地震で目がさめました。
父は「大丈夫、大丈夫」と言って床の中から出て来ませんでしたが、母は大騒ぎで私達を起こしました。私は泣きながら妹を起こしましたが、妹が目をさました時はもう地震はやんでおりました。
それからどうしたかは忘れましたが、学校へ行ったら友達はいろいろ話しておりますが、津波とはどんなものか誰もわかりません。
その中に朝礼になり校長先生のお話で、大きな波が来て人も家も流されて、海岸では大きな被害があったとのお話で、いくらかわかったようで、みんな静かになりました。
家へ帰って大人達が話しているのを聞けば、地震のあとトタン屋根から雪が落ちるような音が遠くの方から聞こえたと言う人もありました。
その中に釜石、大槌方面から津波に遭った人達が転校して来ましたが、わたしのクラスにも3人程入りました。
あまり津波の事は話してくれませんでした。それからは、毎年3月3日の朝礼には生徒一同で黙祷をして、津波の唱歌を歌うのですが、その歌を歌いはじめると、必ず上級生の方からすすり泣きがして、講堂の中はしめっぽく静かになりました。
その朝だけは、わんぱく達もおとなしく教室に入ったものです。

泣き魂は千尋の海に
沈もりて
栄え行く世の柱たるらん

⑤

津　波

上町　赤沼スエ（81歳）

津波の前の年でした。鮑が田老の須賀に毎日のように寄り、これは海底が噴火しているなと思いました。
私の父は、その時、組合長をして居ましたので、会議を開き組合員3人ぐらいで鮑を拾い沖の方へ持って放してきたものでした。
それから1年ほどたった昭和8年3月3日、恐ろしく大きな地震があり、棚から物が落ちたり、時計が止まったりしました。あまりの寒さだったので火をたいてあたっていました。
その後再び大きな地震がよりました。沖の方から大砲でも打つような音が3回聞こえました。
これはと思い下駄をはき、子どもを背負い、お寺へと走りました。少しでも高い所へと思い走ろうとしたら転んでしまいました。その時、また大きい津波が来たと叫ぶ声がしましたので、四つんばいになり必死に登りました。上の方では、先に逃げて来た人達が棺桶をこわして、それで火をたいていましたので私も暖まりに行きました。
そうしていると、波をかぶり濡れた人達が髪をふりみだし、まるで幽霊のようになって「助けてけろー」と叫びながら火によってきました。
ふと、山の上から現在の中学校辺を見下ろしますと、火事が発生しており、その火ごと波に押し流された人達が大火の中で「熱い！熱い！」と叫びながら死んでいったのです。
その声が今でも忘れられません。
あれから、ずい分時がたちましたが、若い人達も大きい地震がきたら油断をしないでください。

⑥

津　波

堺町　三浦チエ（75歳）

まくらを濡らすとはこの事でしょう。
3時に目覚め、津波の事が思い出され泣きました。
津波の前、私の家はお菓子屋、お隣りは下駄屋、下駄屋の木村とみちゃんは同級生、その妹さんがきよさんで、私の弟に嫁いで今でも千葉県で健在です。
とみちゃんの父さん（父親）は茨城県生まれ、母さんは東京出身、

その為でしょうか、お嫁さんも茨城県から来ておりました。お嫁さんは馴れない町で、誰も頼る人もなく、何時も暗い顔をして、台所仕事や裏の方の仕事ばかりしており笑顔が見られず、苦労している様子でした。子どもさんは4歳の女の子で、名前は松ちゃん、一人っ子でした。

松ちゃんの母さんは、私を「チエさんよ」と教え、私は「松ちゃんの母さん」と呼び、私とは仲良く話し合っておりました。松ちゃんも私になつき、どこへでもついて来ました。

私の家では、畑の方に豚を飼っていました。豚あづかいに行く時、豚水の入った2つの缶を肩にかついで行きましたが、天秤棒は左肩に、右手には松ちゃんの手をつないでおりました。

その松ちゃん母子が、昭和8年の津波に遭い亡くなったのです。松ちゃんのお母さんは馴れない町で、どの様な状況で津波に流されたかを思うと哀れでなりません。

松ちゃんのお父さんは、商売用の桐を買いに田舎へ出掛けており助かりました。その他松ちゃんの家族で助かったのは、私の弟に嫁いだきよさんだけでした。

津波来襲後十日くらい経てのこと、母が「松ちゃんだ！松ちゃんだ！」と私を呼ぶので近寄って見ると確かに何時も可愛がっていた4歳の松ちゃんでした。「松ちゃん！」と声をかけると、死んでいるのに応えるように、鼻からプクプクと白いものが出たのを覚えております。

本当に悲しい思い出です。今から50年以上も前のことですが、あの惨状を思い出して今朝は思いきり泣きました。

津波って本当に恐ろしいです。

一人一人が気をつけて、命を大切に致しましょう。

⑦

昭和8年三陸津波

上町　加藤シウ（79歳）

昭和8年の津波が来る前の晩、大きな手まりのような火の玉が海の方へ飛んでいくのを近所の人達と見た。その当時のおばあさんに「これは何かあるなぁ」と言われ「何もなければいいのだが」と、みんなで話していた。

その次の晩、大津波が押し寄せたのである。（あとになって、前の晩がその知らせだったのだとみんなで話した。）

1回目の地震が午前2時30分頃で、大きな揺れを感じた。しかし、その時はなにもないだろうと思い再び寝ることにして床に入った。その約30分後、海の方から大砲のようなドーン、ドーン・・・・　と言う音が聞こえてきた。何の音だろうと言いながらも床に入っていると、また2回目の地震がやってきた。電気は消え、ローソクに火を灯し、祖母とどうするか相談していると、ガラガラと潮が引いていくような音がしてきたので、役場とお墓の間を上がっていった。

やっと上がったと思うと、まっすぐ下には波が押し寄せていた。

また波が引いて、次の波が押し寄せた。1度目は家にぶつかったりしながら押し寄せてきたが、2度目の波というのは、全てのみこんだ後の波なので1度目より強かったようである。

一旦流され、また打ち上げられた人達の「助けてけろー、助けてけろー」と言う声が、あちらこちらから明け方まで続いた。普通なら死なずにすみそうな人も、しばれた一晩のうちに、朝には凍え死んでしまった。

明るくなって下におりていってみると、見るのも無惨な大人や子ども、馬や牛など足の踏み場もないほどにゴロゴロと死んで横たわっていた。中には首のない人、髪の毛が頭の皮といっとしょに剥がれている人など、それはもうひどいものだった。

その哀れな姿は、今でもはっきり思い出される。

もう2度と体験したくないし、また、させたくないと思う。ただ、あの津波の恐ろしさは語り伝えていくべきだと思う。

明治29年

○　津波となって大波が押し寄せる前に、井戸の水がガラガラと音を

たてなくなっていく。
○　最初の波より2回目にくる波が大きい。

⑧

津波に思う

中町　中居進平（81歳）

明治29年（西暦１８９６年）６月15日（旧５月５日端午の節句）突如として、襲来した大津波は、千八百余名の尊い命を奪い、汗して築いた家屋、土蔵その他の蓄財を一瞬にして、海の藻屑にして終う恐ろしい津波、九死に一生を得た人は、三十余名といわれ、この人達は、津波の恐ろしさは絶対忘れなかったのに、後輩達に津波の事を、あまり語り伝えなかったのではないかと思われます。

余りにも悲惨な事で、語るより一日も早く、忘れたいと思ったかも知れません。分かるような気がします。また、津波が来襲する原因が分からなかった為かも知れません。

私が小学校に上がり卒業し、青年に成長してから一度だけ津波の話を聞いたことがありますが、その人の語り方が恐怖心を起こさせるのではなく、昔々○○がありましたという語り口のため、心に印象付けられませんでした。

明治29年からはるか37年しか経たない昭和８年（西暦１９３３年）３月３日午前２時30分、突如として大地震で夢やぶられ、家がいまにも倒れはせぬかと思われるような大揺れで、柱が折れそうな無気味な「ギッチ！ギッチ！」というキシミ音、へたに（うっかり）外へ飛び出せぬぞと布団の中で、このまま家が倒れたら俺は梁の下敷きにならぬ為何の辺に寝ていればよいか等と天井張りを通して、見えない梁の有り場をのんきに考えていました。下（階下）からおふくろに「進平起きたか」と呼ばれ枕もとに置いて着物、帯等を持って、階段をはねるように駆け下りて、座敷でもよったら（衣服を着ること）何か大変事が起きるようで、じっとしていられない不安が湧いて来て、落ち着け落ち着けと己を叱咤しながら、予想される大事は、家が倒壊し、火災が？でも時間的に起こらないだろう、若し火災が発生すれば直ぐに分かる。それらしい事もない。然し、不安が消えない。そんな不安な処へ、兄に「進平外を見て来い」といわれ、「ほいきた！」とタイミングよく裏に出たけれども何も見えない真っ暗闇、人がいる訳でもなし、仕方がないから足を伸ばして沖の通りに出ました。

通りの家々の人達は一旦は外にでたろうけれど、寒い故、焚火にあたって（暖をとる）いるだろうと勝手に推量しながら、田老川にやや平行な仲通りを、町を横断する赤沼川との交流点まで下った。そこには、近くの人達でしょう２、３人の方がサッパ（磯漁の小船）に腰掛けて話し合っていた。

「波の音を聞かんか？」との心の囁きに、その気になり聞こうとしたけれど、丑三つ時なれば、静かなる故話声が邪魔して聞き取れぬので、サッパの舳先の方へ行き耳に手をかざす。波音は聞こえません。なんて凪がいいんだ（よい）など、その時は、それ以上深く考えませんでした。いくら凪が良くても砂浜を洗う音が聞こえる筈と、後になって思うとは。

赤沼山に沿い表に向かって歩き、もう少しで表通りの処へ来た時、不思議にも突然「津波が来た」と叫びたくなり、今、波音のない凪の良いのに、しらない津波を津波が来たと叫んだらどうなる？とんでもないことになるぞと、ぐっと堪え急ぎ足で表通りに駆け上がりました。

すると、目と鼻の先の向かい側の家の横から黒煙がムクムクと昇るのを見て、「あ！火事だ」と思った瞬間、さっき（先刻）の胸騒ぎをケロリと忘れ、駆け寄って見れば煙突からの煙と分かり、安堵して家に向かって歩く。

たかばし（赤沼川に掛かる橋の名称）より私の家まで七、八十メートル位でしょうか、この橋のたもと近くの家の前にお婆さんらしい人が立っていただけ、両側の家々は、出入口を締め、静まりかえっていて無気味でした。私は、ろうじ（家の中を土足で表から裏口までの道路の事）から座敷に上がろうとしたとたん、障子が「カタカタ」と鳴り、「そら！ゆりかえしだ!!」と思わず声をついて出たと同時に、終始炬

燵にじっとして居た兄が「海鳴りが変だ出て見ろ！」といわれ、表に出たなら様子が分かるだろうと思い飛び出して見ました。大勢の人が押し黙って前の空き屋敷と筋向かいの小路を駆けて行く。そんな中で、中島君宅ではお母さんが大声で「サツー」と娘の名を呼び、サッちゃんは「五郎ー」と弟を呼び、五郎君は「お母さん」と呼び合うのを聞きながら、咄嗟に大変だと思い取って返し、あがりまちの処にいた甥（4歳）を抱き上げ、「大変だ逃げろ！」とひと声かけたまま飛び出してみればもう人影もない。走れるだけの力を振り絞って走って赤沼山の山裾で、先の人達に追い着き、いっぱいの人に挟まれながら山に登る。そのほんの少し前に「中居さん、何が出来たの」と声を掛けられても、死に物狂いで走って来たので返事の声が出そうと思っても声になりません。只、みやるだけで通り抜けました。そこには電灯がついて（ともって）いたので釣瓶井戸の縄を握っている若い女の人でした。

なかなか前に進みません。なんせ細い山路で一人一人が漸く通れる道路、何かに追い掛けられているようで、背中が淋しく無気味なので人のあとについて（追随する）いるのがもどかしくて、笹藪を斜め右上の方向に突き進んだら間もなく平らになり、「あれ！」と思う間もなく、切り立った斜面に突き当たりました。（現在の竹部さんの宅地）つかまる物がなく登る事が出来ません。暗くてあたりの様子が分かりません。甥を左手に抱え直し土をつかむ気持ちで必死の思いで、少し登っては滑り落ち、何度も何度も滑り落ちては登り、どうにか登り得た時は、精根も尽き果て地べた（土）に座り込む。卒倒しそうになるのを歯を食いしばり、堪えている中に土の冷たさが、お尻をひやひやと冷やしてくれて気分も少し良いので、上の方で焚き火をしているところに行き、火の香りをかぐと気分が悪くなり、寒いけれど火より離れて気分をしずめる。甥は寒かったろうけれど、以心伝心か泣きもせず寒いとも言わず、じっと堪えておとなしく膝に座っているいじらしさ。

ほんとうに九死に一生を得た私でした。（この続きは後日書くことにいたしましょう。）

4 「大海嘯誌　1982・6・11」重茂・千鶏区観音像建立実行委員会編集部会

(1) 古老に聞く（襲来の様子）

① 姉吉部落　川端つるさん（旧姓姉石）

昭和八年三月三日午前二時三十一分頃、宮古付近で強震（震度五）が発生し、津波の第一波はわずかな上げ潮で始まっている。

当時つるさんの父、姉石茂重郎さんは助かった一人で、ほかに中村恒治さん（重茂の人）、佐藤武男さん、木村好夫さんの四人だけが助かった。ほかは全戸流失、倒壊、死亡及び行方不明の被害であった。

つるさんは当時重茂小学校高等科に在学で重茂におり、三月三日は学校も休校なので、前日は姉吉の家に帰宅しようかどうかと迷っていた。その日は雪があって重茂富治郎先生に「こらいくなあ」と無理にとめられ、一度校門まで出たが帰らないことにしてもどった。それで三月三日の難をのがれることができた。その時帰っていれば今ごろこうしてはいなかったといっている。

生き残った父茂重郎さんからは、次のようなことを聞いていたという。大きな地震がしたので、津波がくるのではと心配して子どもたちに靴をはかせた。戸を開けてみると、外は暗く、誰れの声もなく、そのうちに滝の石垣がくずれたので危険だと思ってしばらく待った。根滝の松野さん（大謀）が津波だ〳〵といって知らせたが、その時はすでにおそく、およそ十六メートルの激浪が十三戸全部を襲っていた。茂重郎さんは鳥小屋の網にかかったことまでは憶えているが、その後、意識を失ったという。次に気がついたときは火のほてりだった。上野鶴松さんに体で暖めてもらっていることと焚き火のほてりだった。背中が暖かくて気がついたといっている。

人肌の効果で意識を取り戻したことと綿入れを着ていたのが殺傷と少しは保温の役をしたのではないだろうかといっている。

根滝の人々は海辺だったので海水が引けることは、わかって避難しようとしたが間に合わなかったという。

佐藤武男さん（当時十四才位）と姉石茂重郎さんは波に打ち上げられ、木村好夫さん（当時二十一才位）も蒲団をかぶったまま波に打ち上げられて助かった。裸同様で逃げた人は凍死が多かったと聞いており、手編のスコッチ（羊毛の織物）を着ていたので、保温に役立って、木村好夫さんは助かったといっていた。しかし下半身はとても寒く、当日は雪も残っており、ようやく現在の昆祐太氏宅附近までたどりついたと聞いている。

翌朝の姉吉の状況は、海岸には土は一つもなく、松の木のあちこちに着物や毛布がかかっており、「サッパ」は一艘もなく、竹やぶにはおったまりや、道路途中のバッタリ（水車小屋）のあった下には材木が沢山集積されており、浜には死骸を弔う親戚の人々も多数あったという。

②

千鶏部落　**川畑寿助さん**
川畑ヒミさん（旧姓昆）

昭和八年大海嘯のときの川畑ヒミさんの家族は、兄弟七人と両親合わせて九人でヒミさんは四番目で小学校三年の時だったという。

当日は何度も大きな地震がしたし、深夜になってやたら「ざわざわ」するので、海に一番近い昆家（現在の集荷場附近に住居があった）では、父さんが「津波がくるのであれば水が引けていくがなあ」といって見に行った。すごく水が引いていたので「これは大変だ」と思って急ぎ家に入り、子ども達をつれて逃げた。ヒミさんは鞄を取りに室にいこうとしたが母さんにこつかれた。ヒミさんと母さんは逃げるのが一番遅かったという。波が襲ったときは丁度逃げている途中だったが杉の木につかまって助かった。兄弟も水で濡れたが、波が強くなかったので皆んな助かった。

千鶏部落では、水をかぶった家は昆家だけだった。勿論家は倒壊、家財は流失、海岸にかなりの作業小屋があったが、全部流失、「サッパ」なども皆んな壊された。

波がきた場所は現在の馬場利夫さんの川向に畑があり「バッタリ水車」の辺と、現在小学校に行く通学路の下まで波がきた。また石浜寄りの方は現在の木村光雄氏宅の庭まで水がきたという。

千鶏部落内では一人も死亡した人はなかったが、新道（現行の県道）作りにきていた朝鮮人数名が海の近く飯場小屋で生活していたが、当夜はおそくまで起きており、三日午前二時頃はぐっすり眠っており全員が死亡した。その三、四日前までは、大方の朝鮮人の人々は昆家に世話になり、飯場に移り住んで日も浅かったという。

およそ津波が来てから三十分後、地区民は高台から下がって焚き火のまわりに集まってきたが、千鶏の人々は全員無事だったという。

明治二十九年の例があるので、姉吉地区のことが心配になり、川畑寿助さん、上野治八郎さん、中村岩吉さん、中村秀三さんの四人で姉吉に向かった。提灯をさげていってみると現在の昆祐太氏宅附近までくると、海岸から上がってきたと思われる。木村好夫さんが「やぶ」の中に入って寒さの為に震えているのを見つけた。

すぐ焚き火をたいて暖め、様子を聞き、一人を残し一人を千鶏に応援に向かわせた。残り川畑さんと中村さんは姉吉海岸に下がって「オーイ」「オーイ」と声をかけてみると、暗闇の中のあっち、こっちから「助けて」の声がした。けれども海の方は波のために行けず、山手の方から救助にかかったが、提灯のろうそくもなくなり、暗がりで思うように救助は進まなかった。

後に積極的な救助活動や物資の輸送警戒に当たったことにより次のような感謝状が四人に授与された。（感謝状省略）

翌朝は、千鶏、石浜、川代地区の人々多数が姉吉の浜に来て災害整理に協力したという。

③

石浜部落　**上須賀きんさん（旧姓石村）**

昭和八年三月三日当時は、石村きんさんの家は、石浜川添いの海岸よりおよそ一〇〇m位、石浜海岸より右側、南に面していた。もう一

軒海岸近く、反対北側には坂本さんの家があった。
きんさんの家族は、父母兄弟合わせて十人、一番上の兄は姉吉の根滝漁場で働いており、八年の津波により死亡した。当時きんさんは一四、五才、一番下の幼児は母が抱いて逃げ、下から二番目の妹は父親が抱いて逃げたが、戸口まで来たが、波が襲ってきたので、居間に引返し、そのまま子どもを抱いたまま気絶、波が引いてしばらくして気づき、後から避難したという。
残りの兄弟は、タンスの上に乗って浮いて助かった人、真先に飛び起きて、すばやく避難した人、三年生の弟は波に流されていったが途中で気づいたら石の上だった。
波は川に沿って、ガアガオとすごい音を立てながら、すごい速さで襲ってきた。その夜は暗かったが、波の為に大変明るくなった。
幼児を抱いた母さんときんさんは裏の石垣を登って大家（石崎松之助氏宅）の方へ逃げたが、母は石垣を登りきれない中に波に呑まれ、幼児の手を放したが、丹前を着ていたので、幸いにその中に幼児が入っていた。また裏の石垣の所には薪が沢山積んであったので薪にはさみつけられて浮いた。きんさんも母を助けようとして波に落ちたが再び自力ではいあがった。
母さんは薪が沢山あって、押されて浮いたこと、家の裏と石垣の間は、ゆるやかに波が引けたこと、大波は一度しか襲ってこなかったことが、幸いして全員無事だったといっている。
家は屋根と柱だけが残り、外はすべて流失した。唯タンスだけは浮いたあと残っていた。蒲団や衣類は全部流失、他より借りて飼育していた馬まで流され、その翌朝千鶏の海岸に打ち上げられており可愛相だった。
石浜の海岸には「サッパ」も殆どなくなり、海岸に一番近くにあった坂本さんの家も倒壊したが、家族は全員助かった。
しかし、姉吉の根滝網に働いていた、松野寅三さんと息子の寅男さん、畠山卯之松さん、畠山一郎さん、畠山万治郎さん（小屋敷）、上須賀一さん、石村力栄さんの七人は、津波の犠牲になった。
波はおよそ、現在の県道の橋の下から海岸寄りに一〇〇m位までとどいたといわれる。

④

川代部落　**川石　謙さん**

昭和八年の川代部落の津波について、今は山田町大沢に住んでいる川石謙さんは、当時川代で津波を体験された一人で、その時の状況を次のように話している。
大きな地震があって、ランプもはげしくゆれ、二時間位たったろうか、外は暗かったが、波がざあざあと引くすごく大きな音が聞えてきた。「津波がくる」といって謙さん（当時二十八、九才）と奥さんと手伝いの子守の人とで三人の子どもを背負って海岸の近くにあった家から急いで逃げた。波は川代の川が低いためか、川筋に添って走り、逃げるのがもう少し遅れたら、足もとを洗われ、川の方へ引き込まれたに違いないといっている。
牛が二頭いたが、出す余裕もなくそのままにして避難した。あとでみると家は波で濡れてはいたがそのまま残っており、牛小屋も牛二頭も波が入って濡れてはいたが無事だった。
波は現在の分校校庭の端まできたが、川代に住んでいる人々には被害はなかった。しかし山田から川代にいか漁に来ていた、万春治さん一家が海辺の納屋を仮住居にしており、いか漁も終わったのでそろそろ引揚げようと思っていたところを被害に合った。親子四人で来ていたが、本人と奥さんは助かったが、子ども二人は死亡した。
また豊間根から材木商の親子がきて、海岸の納屋に泊っていたが当夜は、材木の取引きのあった家、現在の大下喜治郎氏（当時は県道の下に家があった）宅に泊ったので助かり、男の子は流されて行方不明となった。
翌朝は川代地区の人々多数で、残ったサッパ一艘と二日目にして鍬ヶ崎から回航してきた佐々木百太郎氏外三名の機械船を使って三日目まで三人の子どもを捜索したがついに見つからなかった。

(2) 体験記　昭和八年三月三日旧二月八日

①　昆　祐太

春とは名のみ旧二月八日午前二時二〇分頃突然の大地震に驚きました。柱時計は止り電気は消え、四方の高い山々は一面真白く、千鶏の里は雪はありませんでしたが、寒さのため霜の強い朝でした。次の地震の来る事を考へ待つ内に火も無く、寒さの為め家内全員床に就きました。すると間もなく二回目の地震を感じ、風も無いのに急に朝嵐の音が母親に聞こえ、母は明治の時の様子を、津波の来る時は第一に海の水が引ける事を聞いていた事に気付、父に其の旨を語ると床より起き屋外に出た時は海岸一面潮水が無く、その嵐の様な音は海の砂や小石を沖へ引く音でした。同時に沖の方より大きいうねりが見えて来たので、さあ津波だ逃げろと大声でどなりました。其の声を聞くと同時に起床家を出ましたが、幸いに住宅が現在の千鶏集荷所であるために、第一波は向岸に打寄せ其の白泡で闇夜も明くなり、一、二、三波までは確認致しました。でも寄せ来る水は川筋を上り、家内は皆無事でした。その後引水の時住宅一戸、造舟場、炭小屋、舟具置物小屋に宿りし土工夫五人沖合に引かれ死亡致しました。明治の時も昭和の時も潮水の引く事が付物の様です。

当時私は十九才でした。

②　八重樫隆二郎

三月三日早朝に三陸沿岸を襲った大津波、私は重茂尋常高等小学校高等科一年生であった。この津波は三陸沖を震源としての大津浪、我々の財産に大きな損害を与へ又数多くの生命を一瞬にして奪い去りました。故人となられた犠牲者の方々の五〇回忌に当り改めて御冥福を祈り合掌するのみであります。この度当時の災害の記録誌の発刊に当り記憶をたどってみたいと想います。

私の家は当時、現在の千鶏小学校通学路添にあり、明治二十九年の津浪には浪の乗った場所だけに大地震には敏感であった。当日午前二時三十分頃大地震、皆んな起きろとの父の声で床を跳ね起き着替をした。寒さに振えながら母のたくたき火で暖をとる。柱時計の振子は止まっておった。父は振子を動かす。外へ出たり入ったり。私達は炉端で津波話し。私は小学校六年生の時、昆伝次郎先生より教へられた話しを言いだした。先生は織笠出身でその頃は山田町新町に居住しておりましたが先生の幼い頃の話しであった。「津浪をヨダという、ヨダは地震の後くるもので地震の大きい程ヨダも大きい。そして地震後三、四〇分後に寄せてくるものだ」と。母は時計をみておったが「三〇分位になるが」と話しておる時に余震、気持の悪いようなゆれ方、間もなく波の音がザーザーと川の流れの音のように変る。父は外へ出る。「沖でいなじまだ、津浪かもしれない、逃げ出せ」という声にカバンを片手に外に出る。暗闇である。上手の畑中の家へと走る。気の急ぐせいか、つまづいてばかり。殊に母は妹を背にしており、つまづいてはかどらない。後で腰が抜けたとはあんな事でないかとも思った。父がみえない、音もない、心配していると数分後馳せ登って来た。父は火の仕末と戸締りをして遅れたとのことであった。川向の丘には二、三炊火がみえる。夜明をまっておった。しばらくして隣畠を登ってくる足音、これは昆祐太氏丹前姿だったと記憶しておる。又しばらくして人影、これは波をかぶってびしょ濡れで、故人となられた昆ヒデさんと娘ひみさん（現在川畑ひみさん）であった。二人は逃げ遅れ、住宅裏の杉の木の枝一本で助かったと話しておられた。その時の津浪の当部落被害は、昆氏住宅一棟、海岸の倉庫数棟、小舟全流失、生命を奪われたのは海岸の倉庫に宿をとっておった数人の朝鮮人の土工人夫であった。人数等記憶にない。津浪は私の家より約一五〇米位下手を洗っておった。

振返ってみると、大地震後余震、そして津波、沖合いにいなじまのような光、殊の外何となく暗闇と変る。波は沖へ引く、そして沖より波は押し寄せる。恐ろしいものである。

以上記録に止めたい。

③

石崎松之助

津波前は時折微震及弱震があり、二十九年の津波の際もこの様な現象があったと聞いて居り、津波が来るのではないかと下にある家の者は時々待避したのであったが、地震も一時とだへ津波のうわさもなくなっていた矢先に、三月三日未明柱時計が止る。棚の物は落下する程の曽つてない激震あり。津波が来るかも知れないと思い、家の者を起床させ津波が来る時は潮が引くと聞いて居るので浜を見に行く。その時は海も静かで潮も引いておらなかった。家に引返し、津波の心配はないと言って、寒さもきびしかったので着のみ着のままで寝かせ、自分は炉のそばで寝ころんでうとうととして居ったところ、激震より約三十分位たったか、弱震あり。引潮の為めか嵐の様な異様な音がしたので外に出て沖を見た。あのように静かであったのに、乗り出し沖より轟々として白波が見え、乗り出しから陸の方は潮が引いたのか真暗くなって今にも陸によせて来るようなので、津波だと大声で知らせ上の畑に避難途中沖を眺めたところ、絶に波は轟音と共に神社前より石村伊セ松様宅まで押しよせて家が倒れる音が不気味であった。避難した者を調べると、石村伊せ松氏の家内の者が一人も見えないので、親父と二人で呼びながら下っていった処子供の内、竹松、キン、末松、賢三、カヨの五人は泣きながら自力であがって来たので、あかりを見あてに行けと指示す。

賢三だけは濡れないで、あとはびしょ濡れであった。それからさがって家から見たところ、神社の下より斜めに、かずやの家まで白波（泡）で明るかった。かずやは既に半潰しておった。人の声がするので行って見ると、母は末子サメ（当時生後五ヶ月）をだいて逃げようとして、家の脇の水溜りに気がつかず、足を踏みはずし、そのはずみに子供を手放し、手さぐりでだきあげ、びしょ濡れになって助けを求めておった。父もびしょ濡れになって、子供達を尋ねてか、家の中から出て来たので声をかけてはげます。上の畑に誘導し父母は大分弱って居った。畑に幸い乾いたソバからがあったので火を焚き家の布団を敷き、布団で風よけをつくって暖をとる。サメ子は松野クニ様が背中に入れて暖める。四郎が見えないのに気が付き親父と二人でさがしに行く。泣きながら明りを見あてに上って来た。年は八才、奇跡にも元気であった。家の娘の着物に変えて上につれて行き、暖めて皆んな元気を取り戻す。「四郎は流され石にひっかかり、それにすがって水が引けると、明りが見えるのであがって来た」と話しておった。母が元気になると「もし流されないでいたら箪笥の小引出しをぬいて来てくれ、大切な物が入っておるから」と言はれ、取りに行こうと思い電灯をつけて下ったところ、あかりを見て高台に待避して居る者達が「波がまた来た」と大声で上にあがれと叫ばれ気が気でないので、沖の見張りを付けてとりに行く。小引出しには鍵がかかって居るため親父を見張りにして元気になった、かずやの親父と二人で箪笥を運びに行く。そして家の倉庫に入れる。当時石村辰之助氏の開田のため朝鮮人が二、三十人入って居り、何にか物色して居る様に見受けたので、石村氏にお願いして被害家屋には立寄らぬ様にして、上司の指示を待った。石村家の家族は九人で父、母、竹松十六才、キン十三才、末松十才、四郎八才、賢三六才、カヨ三才、サメ生後五ヶ月であり。家は潰れても家族全部が無事であった事は不幸中の幸いであった。

④

佐藤七郎

私等幼少の頃は明治二十九年旧五月五日端午の節句の晩大津浪があり、里部落も全部流れた。そして多くの死者がでたと訓り、毎年旧五月五日は梅雨の頃で漆黒の暗夜を無気味で過ごしたものであった。いつか成人となり、その訓も忘れかけた。昭和八年三月三日(旧二月八日)生涯忘れることのできない大災害が訪れたのである。私は三月二日の晩青年学校の夜学校から帰った。その時宇賀神社拝殿で部落のお婆さん達のおこもりで母も参加していた。二七才の兄は明朝鮭崎灯台の礁

釣りに隣りの兼松船頭さんに誘れ、出漁の支度を整えていた。家に入る時背筋に水をかけられたような悪寒を覚えた。数時間後に大惨事と共に命旦夕に迫りながら、神ならぬ誰もが知る由もなかった。午前三時三〇分頃曽て知らない強震があり、どこの家でもみんな戸外に飛び出したようであった。窓際に寝ていた自分は、いざのときは窓から飛び出そうと痩我慢して起きなかった。平静にかえって夫々床に入った様子、それから三十分位して再び弱震があった。その時隣家のお松お婆さんの「沖が鳴ってだあー」と悲痛な叫びがみんなの耳に鳴り響いた（これは部落の古老後川由太郎お爺さんの伝達による）北風の吹く時よく鳴る向山が凄じい鳴音がしている。素早く衣類をまとい戸外に飛び出した。既に陸に波が押し寄せていたものと思われる。浜の方から電線を伝ってくる凄じい音響、なんと言うか筆舌に尽せない。再度家の中に戻ったら、家族十一人のうち母と兄が、そしてお婆さんと寝ていた姪の知子（当時四才）が残っていた。兄に母を頼むと声をかけ、枕元にあったオーバを左脇に、知子を右脇に無意識のうちに無我夢中で後山の方面に逃げた。二百米ばかりの距離が平坦でなく、畠境には土手が積まれ、山裾には巾三米程の小川が西岸バラやぶ、それをどうやら山に辿りついた。絶えず逃げる後方から風となにかに押しのめされるような感がした。無我のうちに辿りついた。山裾で動けなくなった。そこは既に逃げよせた数人の人がいた。自分は動けなくとも、もっと上に登れと声を限りに叫び続けた。翌朝そこにオーバと帯があり、打ち寄せた波跡と一米もなかった。逃げ寄せた山で声をかけ合い、そこに拾数人が集まった。どこの人も自分の家族が夫々の逃げ方をしてみんな生きているものと信じている。寒さが特にきびしい。チョッキのポケットにマッチがあった。枯木を手探り集め暖をとる。そうしているうちに警防団の提灯を先頭に捜索隊が見えたので山を下りた。変わり果てた部落があった。提灯の案内で部落の被災しなかったところに移動した。素足である。寒さきびしい。墓所の下あたりに大きな焚火がなされていた。足を温めた。度が過ぎて後で水ぶくれになり難儀した。材の下になって救を求め助けられて運ばれてくる者、死体で運ばれる者、刻がたつ、夜が明け、調査が進むにつれ、被害と行方不明者が続出した。沖が鳴ってることをみんなに伝えた。お松婆さんも孫を背にしたまま帰って来なかった。うちでも母と兄が、兄は後山裾の川に家材の下に、母は大浜の海岸に下半身砂に埋まって発見。あの道路を浜から背負って運んだ時の気持ち、想像を絶するものがある。里部落の被害は人畜は別として、浜の倉庫、舟漁具はもとより住家四四戸中二三戸も流失した。津波は引波の力が大きいと言われているが押し力も大きく、臼木雑貨屋さんの前に金毘羅神社の碑が百米位上方の田圃に押し流されていた（今は高台の宇賀神社の境内に移されている）。津波は油断は禁物この津波でも日の出屋さんを始め、真向から波を受けながらも一人の犠牲もなく逃げよせているところもある。不断の心がけが大事。

⑤

栗津雪治

三日夜半、二時半頃、未だかつて経験したことのない、大きな地震にたたき起された。急いで外に出た。父は、

「新築したばかりの家だ。つぶれることもあるまい。」

とのんびりしていた。母は火をたいて、皆であてた。寒い寒い夜だった。母は、臼木さんの方へ行って、すぐ戻って来た。

「海の方で音がしている。」

と言う。

「津波の時は、川の水が引けると言うが……。」

俺は見に行った。向渡橋に行くと、川には水がなかった。一部に氷がはいっていた。海の方で大きな音がしてきた。

「津波だあー！」

と後川由太郎さんが浜の方からさわいで来た。急いで家に帰る。

「津波だ！　逃げろ！」

母と妻を出し、父がもたもたしているのを連れ、後ろの田の土手を裏山へ向って、無我夢中で走った。家を出た時には、川づたいに波が

上って来る。田を越え畑の土手に行った。前日まで子供達がソリスベリをしてツルツルに氷っていて、上がろうにも滑ってどうにもならない。その時、波に追つかれた。夢中でつかまったのが、土手の上の梨の木だった。九死に一生を得た思いだった。とたん、「父は?!」と辺りを見回した。白い泡、電柱が倒れ電気がショートする光、家屋の倒れる音、ぶきみな光景だった。父は渡辺さんといっしょに畑のさくをもぐったころ波に追つかれ、押し流されたらしい。次の波(四尺ぐらい)で家が流されて来た。父と渡辺さんのいたすぐ前で止まり、父達はその屋根のお陰で、引き波にもとられず大事を逃れ、大声で呼んでいた。体中傷を負っていた。特に手足はひどいものだった。母は、引け波でとられた。暗やみで尋ねたが、見つからなかった。栄松さんの家族も田を走り逃げたが、波に追いつかれ流された。家々の流れる音、電気の切れる音と光、真黒の波そめの立つぶきみな光、何ともいい現すことのできない様相だった。母を亡くし、新築したばかりの家を流され、唯々暗涙にむせぶのみ。前から、後川勘之助さんは、「明治二十九年に重茂川がオシンメ様（神明堂）の方へ流された、と聞いているが、昭和七年頃から又、川の流れがオシンメ様の方へ流れているが、津波がこなけりゃいいが。」といっていた。又、漁に出ている人達は「この二、三年、逆潮が流れている。何もなければいいが……。」などいわれていた。小さな地震も頻繁にあった。何とも異様な年が続いた。にも拘らず、甘い考えが被害を大にしたのでは、と今更ながら悔恨するのみです。

⑥

伊藤福治

明治二十九年、当時音部部落は戸数約四十八戸（小角柄に六戸、現在二十九戸）、音部里部落に四十二戸（現在二十戸）が当時の部落であったそうです。現在の笹見内部落には当時一戸もなかったそうですが、明治二十九年、昭和八年の津浪以後高台である笹見内に移転し、現在では五十戸になり、音部地区第一の戸数を成しております。明治二十九年の津浪以前は、浜工事の関係から浜に近い場所が便利であった為め、海に近い所に住居を構えていたわけです。明治二十九年の大津浪の震源地は宮城県金華山沖、震度はマグニチュード八位、丁度旧端午の節句、六月十五日は午後八時頃大津浪が襲来し、音部里部落の死者約二百余名、家屋の流失四十戸、内二戸は倒壊、そして漁具、倉庫など全部流失してしまったとの事です。津浪は海から川を上り三千米まで達し、水位は海面より五～十米もの高さに及んだと言われています。昭和八年三月三日の大津浪は震源地は明治二十九年の場合と同じ金華山沖で、明治二十九年より数えて三十七年を経過しております。震度はマグニチュード七位、津浪は海岸から陸上四百米位まで達し、川上に約八百米上り、水位は二～三米位であったと思います。音部地区の死亡者十三名、内音部地内三名、根滝漁場の姉吉漁舎で七名、高浜方面の出稼先で女が三名、家屋流失一戸、倒壊二戸、漁業用倉庫約六十余棟、漁舟八十隻余であったと思われます。当時私は二十代で地震の種類は判りませんがその時の地震は上下に揺れました。普通の地震は横に揺れますが、寝ていて体が浮き上るように感じました。昔から地震がしたら出入口の戸を早く開け放せ、と言われているように、すぐ様戸を全部開け外に出て見ました。津浪が来る時は川の水が干上ると言われていたので家の前の川を見ましたが何んの変化もありません。近所の人々も外に出て来ました。その中には明治二十九年の津浪を経験した老人も居りましたが、津浪の話しもなく、ただ「寒い〳〵」と言って家の中に入ってしまいました。例えにもあるように、災害は忘れた頃にやって来ると申しますが、この二人の老人はかつての大惨事を忘れていたのでしょう。外に出た人々もそれぞれ家に入り、私ももう一度寝床に入りましたが仲々寝れず、三十分位過ぎたでしょうか、前の山に大嵐が吹いた時の様に、ゴーゴーと言う音がします。いつもなら強い風が吹いた時に鳴る音であるのに風の音も違うし、家の雨戸も音がしない。不思議な事だと思っていると、浜の方から大きな異様な音がしました。津浪の風圧で浜の倉庫や漁舟が倒壊破損する音だったのです。と同時に海岸の方から人々の騒ぐ声がしたので津浪が来る

なと思いすぐ家内中を起し、後の山に避難させました。そしてすぐ浜を見ました。浜の砂丘は津波が引いて行く所でした。津浪が砂丘を越えたのは三波位ではなかったかと思います。その時重茂地区全体で被害の大きかったのは姉吉、元村、里部落で、音部部落は死傷者も比較的少なかったのです。地震学者の話しですと、地震が強いから津浪が来るものでもなく、実際数年前のチリ地震津浪は外国の地震によるものでした。現在では、地震発生と同時に、ラジオ、テレビで速報を流し、人命に関する心配がないと思われますが、私の経験から、上下に揺れる強い地震が来たら、ラジオ、テレビの速報もさることながら、浜に住む人は急いで高い所に避難するよう、子孫に伝えるようにしたいものだと思います。

5　「チリ地震津波より三十年　あの惨状を振り返って」

高浜自治会

①

チリ地震を見て

宮古消防署長　岩　田　銀　蔵

大きな波、湾の奥を駆けて押し寄せ、真っ黒く濁った水が舟やカキ、ワカメのいかだ、ゴミなどいろいろなものを巻き込んで来る波を、白々と明けた海で見た。

当時、日立浜東水工場前の湾内には輸入ラワン材を浮かべていたが、つなぎが解け流れだし水産施設に被害を与えたり、須賀に打ち上げられたりした。出先埠頭の埋立てのため閉伊川河口には珠童丸という浚渫船がいたが、その大きな船体が波にもまれて、手のほどこし様のない状態となり岩壁には近くの人々が集まり騒ぎたてていた。「寝耳に水の如く」地震の前振れもなく不意をつかれ、かつてない災害発生の過程をまざまざと見た。悪魔の手先に、なす術もなく誰れしもが恐れおののいていた。どうにかしなければと焦ってみても自然の猛威に立ち向かうことのできぬ無力に憤りを覚えながら、消防署に勤務して四年目の山国出身の私が緊張の極みに立ってチリ津波を見た時の印象であります。

津波は山口川を遡り市役所の前に在った消防署にも押し寄せたためポンプ車等は移動させ、沿岸地区の人々を避難させるためジープで菊池市長とともに高浜、金浜方面へ向かった。市長は「これは訓練ではありません本当の津波です。安全な場所へ避難しなさい。」と繰り返しマイクを使って叫び続けながら藤原、磯鶏を過ぎ高浜峠にさしかかった時には高浜、金浜は波に呑み込まれるが如く被害が広がっている最中であった。ジワジワと押し寄せる波は、それでも強大なエネルギーを持ち建物はひとたまりもなく無惨に壊され、カキ棚に取りつけられた樽や海苔ひびの芝や板柱ラワン材などが真っ黒な水とともに幾度となく湾の中を行ったり来たりしたために、赤前や他の沿岸部も大打撃を受ける破目となったものであります。

あれから三十年の歳月が流れ、多くの災害を見てきたが高浜、金浜の災害は忘れることのできないものとなっています。

またいつとも知れぬが襲って来ると思われる津波のために堤防が築かれたが、反面歳月の流れとともに人々の心から津波の恐怖が益々薄れつつあるのではないでしょうか。真に築かれなければならないのは心の中の防波堤であり防災は第一に精神の問題であり、対策工事もさることながら「自分の生命は自からが守る。」この信念の中で日頃の備えを確実なものにしていかない限り、災害は繰り返されるでしょう。各個人が防災の知識を持ち地域ごとに協調しあって防災対策を進めていくことが今後の課題として大きく取り上げる事項ではないでしょうか。

②

発刊によせて

宮消第十一分団分団長　岩　間　忠　志

平成三年春、わが町宮古市も五十歳を数える。幾多の先達の手で造られた自然豊かな「みやこ」その歴史を年表、データ等で振り返って

見るに、大小地震、津波は二十件を超えると記録されている。
昭和に入り五件あり、その中で私の経験した津波は四件である。
昭和二十七年三月四日　十勝沖地震小津波
昭和二十七年十一月五日　カムチャッカ沖地震小津波
昭和三十五年五月二十四日　南米チリ中部地震中津波
昭和四十三年五月十六日　十勝沖地震小津波
当時高浜は津波の度、自然を変え、町を変えて来ました。戸数にした百七十戸位と記憶しておりますが、その大半が、現国道と市道の中にあり、二戸位を残して壊滅的な打撃を受けたチリ津波は、五月二十四日午前四時四十七分頃の第一波ではないかと思って、私宅の水位を示すプレートに刻んで保存してあります。それ迄に、津波の恐ろしさについては、学校、先輩より教わっておりましたが、本当の恐ろしさを体験したのが、チリ津波である。
一瞬の事でありました。
小生二十一歳!!錯覚でしょうか。黒と白の閃光が目の前を走り去り、ゴーゴーと地の底から出る様な音、家の窓ガラスが鳴る、人の叫び声が聞こえる。月山の半分が波の盛り上がりで見えなくなり、湾内の水がからからとなる。家屋と共に流され、助けを求める人もある。
落ち付きをとり戻した時は、もう、二波も三波も終わってからだと思う。家の前の家屋も道路も消えていた。大きな波は、先づ湾奥の赤前、津軽石を襲う。その返り波で金浜、高浜が被害を受ける。その繰り返しが一日中続く。
我々が小学校、中学校と学び、校史七十数年を数えた校舎、講堂も壊滅的な打撃を受け、その後、高浜小学校は災害復旧事業として現在地に新築移転となりました。又、湾内の貯木場からは、ラワン材が流出し各養殖施設、港湾施設、船舶に多大な被害を与え、更に山田線金浜ガードの線路上に上り鉄道は半月以上ストップした。今のガード付近に仮設プラットホームが出来、津軽石駅とを徒歩で結んだのであります。
津波は夕方には一応、峠を越したという情報で、消防団は金浜鉄道下に焚火をし、夜警に入ったが、何回か余波に焚火を消され移動せざるを得なかった。第十一分団は、金沢幸治分団長指揮下に入り管内に数ヶ所の指揮班を配置し長期的警備に入った。高浜は田舎屋食堂広場にテントを張り、二十数人が昼夜常駐した。県警の白バイが二台配属になり、半月位警戒に当っていた。
日常生活については、飲料水は市の配水車が一日二回来て、バケツで割り当てをいただいた。食事は炊き出し等に依り心配なかった。又、市内各高校の生徒さんより、後片付け、清掃等に一週間位ご奉仕いただきご苦労を掛けました。尚、全国各地から心温まる義援金品をいただき助かった事は、一生涯忘れる事は出来ません。お陰様にて、復旧が早く、今日に至っておりますが、防災整備のなされ、管内の水門、ひ門大小八基が設置され、有事の際、津波を完全にアウト出来る様になりました。地球の裏からの自然のエネルギーの強さ、怖さをまざまざと見せつけられたチリ津波、それを克服するのは人間の知恵であります〝備えあれば憂いなし〟津軽石河口にも百億近い大投資がなされ、大水門の建設がなされる様で、社会資本は着々と確実に整備されて行きます。災害は忘れた頃にやって来るといわれますが、我々消防団は、威勢の良い火消し消防から予防の消防に変りつつあり、地域住民の皆さんと一致協力し、「水火」を厭わず、先輩の培った義勇消防精神を継承し、赤伴天を誇りに皆さんの安眠を守る様、努力してまいります。
〝安眠を守る我等は　ここにあり〟

③

チリ地震津浪の思い出

元高浜小学校校長　中　島　三　郎

昭和三十五年五月二十四日の未明、突然消防団員の笹平さんに呼び起こされ、何事かと聞きました。
「宿直の先生が居ない様ですね」
「実は四・五日前に新しく出来た宿直室に引越しました。宿直は教頭先生です。居る筈ですが何事が出ましたか？」

「電話を御借りしたくて参りました。実は海の潮の流れが狂って居る様ですので消防本部か測候所に問い合わせて、部落の人達に知らせなくてはと思って」とのことでした。

「職員室の向いに宿直室が出来ましたから島田先生に話して電話を使用して下さい。私も後から参りますから」と言って、家族の者に俺の直感では「よだ」が来るかも知れないから高台に避難する様命じて早速私も職員室に走りました。窓越しに校庭を見ましたら海水が県道を滝の様に校庭に流れ込んできました。笹平さんや島田先生にこれは津浪だ。裏の山に逃げましょうと促して校舎の裏に出ると、もう裏にも海水が廻って居ました。島田先生と住宅の前に渡って高台に避難しました。

少し間を置いて海水が引いたので、子供達の着物でも持ってこようと坂道を降りて途中まで来ると高台の方から「海水の引き方が大きいから今度は大浪が来るから引返せ」と叫ぶので高台に引返して海を見たら湾一杯の海水が七、八mの高さで押し寄せてきました。全く壮観というか凄まじい様相でした。内湾に臨む高浜、金浜、赤前、津軽石の地域は津浪に呑まれ一面海になった様でした。

その間に目撃した奇跡が二、三ありました。

(1)下畑中の家屋が校舎の裏の便所の屋根が流れ着いたとき二階の窓から五人ばかり屋根に渡り、屋根づたいに校舎の二階の窓より廊下に降りたので安心しました。間もなく家は役目を果たしたという様に流れて行きました。

(2)小舟に二人乗って浪にもまれながら沖に流され、岸に流されそれを繰り返して居たので、はら〳〵して居りましたが、暫くして金浜の方から下畑中のおじいさんとおばあさんが来ましたので小舟の二人はどうなったかと聞いたら「あれは私達です」金浜の鉄道線路の上に流れついたので無事だった由、同じ家の人達が両方共幸運だったと励ましました。

(3)岩間由次郎さんの瓦屋根平屋が引浪に流されて高台から見えなくなりました。皆さんの話を聞きますと家に人が居るらしいと云うことでした。大変なことになったものだと思って居りましたが後で聞いたら磯鶏前に流れて行って屋根の上に居たのを漁帰りの岩間良二さんの舟に救出されたと聞き、私の目撃した人命に関する事項は皆奇蹟的に無事であったことは本当に良かった。

浪が引いてから島田先生と二人で校舎内外を見廻りしたら驚くことばかり。教室の相仕切の壁が丸太でつき破られ、丸太が二教室にまたがっている。又、窓硝子や校具は勿論影も形も見えない。ピアノは音楽室から流れ出て東昇降口にあった。生徒の机、イス、職員室の事務机、イス等は講堂の床板が水圧で浮き上り、その下に流れ込み床が下って一部分の隙間から床下が見えるという仕末。又、校庭を見れば雑物が散乱して居る。花崗岩（みかげ石）の門柱が倒され、六、七m移動していた。尚、罹災地の状は唖然とするばかり、島田教頭先生と話したが、津浪がもう一時間半も遅れて登校時間になっていたら大変だったであろうと……。

震源地は南米チリ国コンセプション市沖と推定され、五月二十三日午前七時頃マグニチュード八・七五の大地震が発生。海底の地殻の変動が起き、海水を押す力が働き約二十一時間で宮古に達した事になる。

災害後、校舎やその他の施設は使用不能となったので臨時休校にし、職員は家庭訪問をして御見舞旁児童の確認を実施した。市並びに教育委員会等に磯鶏小学校の西井校長、晴山先生から働き掛けて貰い、磯鶏小学校を借用して、バス通学で授業を開始した（十月頃まで）。その間被災校舎の応急復旧後、授業は再開されたが、校舎の移転を部落民から強く要望されて、南高台を選んで校地が定まり、翌年六月二十日にブロック建のモダンな校舎の落成を見た。

被害の概況は左の通り

㈠死者一名　㈡住家流失七六戸、全壊三六戸、半壊七〇戸

㈢罹災者八五三世帯、非住家一三七棟

高浜小学校の被害が大きく復旧費六五〇万円

㈣土木関係一八一、一四九千円　㈤農林一七二、三七四千円

㈥水産三四三、九一三千円　㈦商工三八、二九一千円

(八)通信、電灯施設一三、五〇〇千円

以上

④

チリ地震津波の思い出

元高浜青年会会長　佐々木　精　一

チリ地震による津波は過去において、東北地方になんらかの影響を与えたものが十回、そのうち多少なりとも被害を与えたものは五回もありました。しかし三十五年の様な規模の大きいものは一つもなかったそうです。それ程大きいチリ地震津波を体験した一人として、後輩達に何か参考になる事を伝えたい。

昭和三十五年五月二十四日午前四時三十分頃、小型のリヤカーに野菜を満載して磯鶏方面に出掛けた筈の母が間もなく帰って来た。まぐりの雨戸をドンドンたたきながら「あくそが高くて、皆が船を繋いでいるぞ」「津波がもしれないっているぞ」と言う叫び声がした。「地震もなかったのに、津波なんか来る訳ないだろう。いつもの高潮だべ」とブツブツ言いながら飛び起きた。ゴム長靴をはき、自転車で一路釜場前の船揚げ場に向った。揚げて置いた舟にはすでにアンカーが下ろされ、とも綱も補強され二本もとってある。かなり前から潮の動きはあったらしい。周りをみたが人影はなく、何か無気味な感じがした。やっぱり津波だろうか。いつしか自転車は、跡浜方面に向っていた。米沢商店を通り過ぎた途端、道路一面に海水が流れ始め、深さは五～六㎝。流れは速い。「これは津波だ」その瞬間、膝かぶがガタガタした。急いでペダルを踏んだが、いっこうに進まず、はなこうさんの所から五十m程あがった所に古い墓地があり、清めの塩を置く小屋に数人が避難していた。向いの土手に自転車を転がし、潮の引いた葉勢場さんの家に掛けつけた。「何か運ぶ物を出して下さい」と言いながら手当たり次第運んだ。米袋と寝具、そして三回目の寝具をかついで五十m程も走ったろうか。「今度は大きいぞう。早く早く」と言う声。さざ波の様なものが突進して来る。ここまで来るだろうか。ふと見ると、墓地の前方の畑を走っている人がいる。豊治さんだ。あと十m位で小高い丘である。さざ波が足についたと思った途端、バタリと倒れた。びっくりして、飛び出し腕を引き寄せ、土手のある丘に揚げた。徐々に海面は高くなり古い墓地にも冠水して来た。危ない！今度は山の方に移動した。そこには二十人程の人が集っていた。えびすどうの裏山に八幡神社があった。その奥の高台から赤前から金浜方面の様子が良く見えた。海は真黒な泡の様に見えた。金浜の方から海面がぐんぐん盛り上がって来る。みるみるうちに、小学校前が渦の海となった。その瞬間である。屋根が流れて行く。その屋根に人が見え始まり、「一人また見えたぞう」水が増して来て、中二階とか屋根裏に逃げた人達が屋根を破って助けを求めているのである。荷物を運んだ小高い丘も、今では黒いもくずと化し、その面影は無くなってしまった。ただ呆然とした。生きた心地がしないとは、この様な事を言うのであろうか。ふと時計を見たら午前十時を指していた。この五時間、悪夢であって欲しかった。

思い出にのこる事項

一、公民館用地の流失

高浜青年会では、代々引き継いできた青年の森を売却し、公民館を建設するため用地を取得し、部落民全員により用地造成がなされていた。反対する者からは、津波で流れるような場所を選定したといって非難をうけたものである

二、高浜部落会に災害復旧資金として百万円貸付

高浜青年会では、公民館建設資金として確保した百万円を災害復旧資金として貸付することにつき、臨時総会を開催し万場一致で決定された。

三、のり糸状体培養施設の流失

高浜青年会（産業部、水研グループ）が、宮古市から助成（三万円）を受けていたビニールハウスと糸状体培養貝殻三千枚を流失する。

四、防犯体制の確立に努める

現在の高浜バス停付近にテントをはり、先輩団員の指導のもとに日夜防犯に努めたテント生活。そして、一つの事故もなく終了したこと。

五、地震がなくても津波はくる

地球の裏から、一昼夜もかけずにやってきた。まさに、世界は一つの実感あり。

〝津波から　国際化の波　教えられ〟

取材

⑤

佐々木シミさん宅を訪ねて

司　会＝おばあさんは、ハモ漁の名人である夫の亀治さんと一緒に出漁していたという事ですが、津波を感じたのは。

シ　ミ＝出漁したのは五月二十三日の夕方四時頃でした。ハモ胴を入れ五回操業していたが、堀内と小堀内の間の堤防の中で、朝方まで津波を知らなかった。沖合に出て見ると海水が白く沖にいるソバ鳥が沢山いたので、何か異様な感じがした。集荷場前の桟橋に来たら、カジヤの父さんが「津波だから早く丘へあがれ」と言ったので、一旦あがりましたが、前日抜いた杭が桟橋の所に流れついたので、錨綱で縛ろうと作業していた矢先、大きな波に襲われて流されてしまいました。無中になって泳ぎましたが舟は五間位離れていました。波に押されて舟にたどり着き、おじいさんに助けられました。波の勢いはすごく、おじいさんと舟に乗ったまま、小学校の講堂前―大下前―磯鶏前―赤前須賀まで流されました。松原の丘寄りに錨を下ろし凪が良くなるのを待った。しばらくして納まったので、錨を揚げようとしたが、ゴミ等が沢山流れていたので錨を揚げることが出来ず、錨綱を切って、流れていた一時間半位の竹竿を二本拾い、二人でつっぱり、津軽石川河口のご先祖様の大神様の線路の上にあがることができました。

司　会＝かなりの距離を漂流なさった様ですが、舟は自力で動かなかったんですね。

シ　ミ＝桟橋までは来たのですが、舵を流されたので、どうにもならなかったです。今思えば、藤の川まで流された時、おじいさんが「あの石屋根の家は俺が家だ」と聞かされた時、茫然としました。

司　会＝丘ではお母さん達が、大変な目にあった様ですね。

サダ子＝私達が起きたのは午前五時過ぎだと思います。その時は家の後まで流出物が来て居り、一番波なのか二番波なのか分かりません。子供達には高屋敷に行っていろと出してやりました。山崎善吉さん達が墓所山を越えて来て「何をしているんだ！早く逃げろ」と怒鳴って来ましたが、男手等もあり、タンスの物等を二階に上げていましたら、波が押し寄せて来たので二階に上がりました。家は流されたのですが周囲の柴の木に引っ掛かって居た様です。大工さんが屋根を破ろうとしましたが、なかなか破られそうもなく、中二階の半間のガラスを破って出ようとしたら、丁度、小学校の便所の屋根の所に流れたので屋根に飛び移ったのです（私、山崎夫婦、長沢けい子さん）それでも不安だったので、北側二階教室に上がれというので我を忘れて二階に上がりました。上がって周辺の家を見ましたが、ほとんど家は流失してました。

司　会＝一家でおじいさんとおばあさんは出漁中で、お母さんは子供達を抱えて留守宅での出来事で、各々神に祈る心境であったと言葉では、言い表せない漂流記であった訳ですが、その時、お父さんは、

源太郎＝私は田代島の定置網に行って居り留守でした。朝川の網起しの最中だと思います。海の上であり、潮が早いだけで、何とも思って居りませんでした。

司　会＝津波の教訓として後世に残す言葉等ありましたらお願いします。

サダ子＝小さい子供が八ヶ月の時のチリ地震津波は音もなくやって来た予期せぬ津波でした。その子供も二児の母親です。私達が幼少の頃はヨダが度々来て馴れていたし、地震がしてから時間があって襲来したものですが、外国の地震でも津波が来るという事ですね。

シ　ミ＝三陸沖津波は地震がして、その場に立っていられない程の地

響きがしたものですが、チリ津波は全く予期せぬ津波で、私達家族にとっては神様、仏様が守ってくれたと思います。

源太郎＝チリ津波後、あの恐ろしさに二度と逢う事がない様、現在の高台に家を建てた。津波防波堤は出来つつあるが、集荷場前から金浜に連なる堤防の延長を早期に完成して欲しいですね。

司　会＝八十七歳のおばあさんをはじめとして、ご家族の皆様どうもありがとうございました。

⑥
小林千治さん宅を訪ねて

司　会＝津波を受けた時の事をお伺いしたいと思いますが。

小　林＝私も沢山の津波を経験しました。その中でも昭和八年の津波。三十五年の津波は忘れる事が出来ないものですね。十勝沖地震津波の時は、かなり高い所まで来ましたね。私は藤畑の山林に行ってましたが、法の脇付近が水で通れない程の水害でしたね。

司　会＝十勝沖津波の時は、高浜の堤防は完成していましたが、集荷所付近の低い護岸堤防の所から、水が越えて来ましたものですから、津軽石方面の堤防のない川添いに波が入って行ったんでしょうね。

小　林＝そうそう高浜の堤防はチリ地震津波位を想定して高さ六・五mの堤防を造ったのですが、現在、周辺の堤防も完成し、従来の堤防にかさ上げして構築していますので、あの高さの堤防では大丈夫だと思うのですが、津波ばかりは、これ以上来ないと言う保障はありませんものね。津波と言えば、地震がしてから来るという常道を三十年前のチリ津波は外国の地震での津波だったので想定も出来ませんでした。現在ではテレビで注意報でも出したでしょうが、三十年前はハワイで津波が襲来していると言うのに、宮古では何の予報もなかったですものね。

司　会＝チリから二十三時間後に襲来したと言われて居ますね。

小　林＝金浜の方々から聞きますと、五月二十三日の夕方、ハモ漁に出漁する際にも、潮が狂って、津波の気配がしていたと言われて居ますね。頑張って操業して来た舟が、当日の朝の襲来の際、高台で見ていましたが、二隻ばかり舟に人が乗り漂流していましたが、その人達は油屋のおじいさんと金森和助さんであった訳です。竜右ヱ門さんは赤前の松原に舟ごと流され、松林の枝につかまって助かったという事ですが、金森さんは津波の犠牲者になりましたね。

司　会＝津波の歴史を調べてみますと、チリ津波は浅瀬に来てから大きくなっており、三陸沖津波は沖で波高が大きく、浅瀬に来て砕けるという特徴をもっていたようですね。チリ津波襲来の様子をお願いします。

小　林＝津波が来たのは第何波か知れませんが丘まで上がったのは午前五時半前と記憶してます。前日一日一杯山を歩いて来て、疲れてぐっすり眠っていたものですから人騒ぎするので目覚めた次第です。子供達を避難させましたが、その時点で床上まで浸水しました。この程度と思い荷物を片付けようと思いましたが、畳がプカプカ浮いて、思うように仕事が出来ませんでした。昔の人は「災害の時は仏様をまず最初に避難させろ」と言いますが、夢中で荷物片付けをしたものですから、位牌は流失してしまいました。その中に大きな波が来て家を出る事が出来ませんでしたが、丁度その時、玄関前にサッパ舟が流れて来たので舟に乗り高台へと漕ぎました。高台の津波の様子を見ましたが、出崎までは水が引いて空っぽでしたが、向側の堀内を赤前、津軽石方面へ木の葉の固りの様な鉄砲水が赤前須賀から金浜そして高浜の低い地面へと押し寄せ家屋の三分の二以上になると家屋は浮いて流れ出しましたね。子供達は「俺が家が流される」とあちこちで泣き出し、悲惨な目にあいましたね。屋敷には家の形は一つもなく、屋根の一部が赤前の田んぼまで流されていましたし、タンスの小引出に入れて置いた奉公袋は赤前須賀に、不思議なのは、昭和三十二年に死去した妻の位牌が赤前須賀にあったと、宮ヶ崎のおばあさんが届けてくれた事です。記念の仏様として大切に祭っています。

司　会＝津波に対する教訓をお願いします。

小　林＝チリ地震津波の時は子供達も大きくなって、何度か津波を体

験していたし、避難することは分っていたのですが、今の孫達は昔の家があった所は教えていますが無感心の様です。昭和八年の津波では、出崎で藤原の方々が魚粕を干しに来て犠牲になって居りますし、津波に対する恐怖というのは体験して見ないと分かりませんが、現在では防災無線も設置され、情報は的確に入り、余裕もあると思うので、津波が来たら避難する事ですね。

司　会＝どうもありがとうございました。

⑦

記録の中から

高浜財産管理組合

五月二十四日午前四時頃、突如としてチリ沖地震による津波が来襲。瞬時にして部落戸数の大部分を流失、全壊あるいは浸水した。その内訳は、流失全壊六十五戸、半壊九戸、床上浸水二十八戸、被災人員五百九十三名、その他漁船、漁具、加工場等の流失多数あり幸いにも死傷者は出なかったが、その被害の甚大なるは、全く夢想せざるところ、部落民一同呆然自失、天を仰いで慨嘆する態なり。

直ちに全役員を招集して、災害救助班を編成し、非常態勢に入る。

まず、罹災者に対する炊き出しを開始すると共に、警察、消防団及び漁業協同組合に連絡して救援を求め、仮救援本部を部落委員長宅に設け、各方面の情報収集に努めて、応急処置を講じた。その主要なものは⑴電話の臨時架設　⑵消防団、市内高校生による流失や全壊した家屋の取片付け、自衛隊による道路、橋の応急修理　⑶罹災者に対する毛布、ローソク、マッチ、懐中電灯の配布、その他緊急必要なことについての処置に万全を期した。

五月二十五日、前日に引続き、非常態勢を持続し、飯米の配給六日分を行ない、又、飲料水の供給を市当局にお願いし、直ちに開始された。自衛隊、消防団、高校生及び婦人会等の出動も前日通り行われた。又、罹災者の名簿も作成され、今後の活動に備えた。

五月二十六日、前日通りの態勢を続ける。この日は、各方面から寄せられた救援物資並びに義捐金の第一回分を支給した。

尚、二十四日より臨時救護班を架設し、市内の医師、看護婦、保健婦等の派遣を要請し罹災者の保健、防疫業務を開始した。

以後、八月中旬まで、非常態勢を継続して復旧対策業務に当る。その間、救援物資、義捐金、その他、各方面より見舞品等の多大なること、感謝の外なし。

尚、義捐金は前後四回に亘り、総額二百八十六万五千円余にのぼる多額であった。

救護状況は、医師十五人（保健所、宮古病院、診療所、済生会病院、湊谷、関根、若山、山崎の各医院）、延日数百五十日、看護婦二十人、保健婦二十三人であった。お陰で、災害地に発生し易い、悪疫患者も関係者のその措置宜しきを得た為か、発生を見なかった事は、不幸中の幸いと言うべきであった。

次に住宅対策は、災害救助法の適用により、自力復旧の能力がないと認められる者を収容すべく、応急仮設住宅を十九戸建設する事を市当局に要請し、六月九日、請負業者北文、白根両氏により着工し、完成と共にそれぞれ入居せしめた。応急修理に対しても災害救助法の適用により、小修理費は一戸当り一万九千六百円とし、生活困窮者に対しては、全額県負担の指定を受け、市当局の調査により罹災者の一部に適用せしめた。

災害復興住宅は住宅金融公庫の資金を借り受け、建設及び補修をなさしめ、復旧の促進を図った。尚、これが償還に備えると共に、業務の分担を図る為、償還組合を結成し、その業務を移管した。

住宅建設に必要な敷地に関しても、農業委員会と密接な連絡をとり、農地転用その他緊急事項につき、簡易且つ適切な措置をとり復旧の便宜を図った。

その他の復旧対策についても、関係当局と交渉し、出来得る範囲において、復旧に向けて努力をした。

この記録は当時、高浜財産管理委員長であった故佐々木惣蔵氏が、書き残した記録をまとめたものである。当時、高浜地区は財産管理委

員会（現財産管理組合）が地域活動の中心で、現在の自治会が組織されたのは、これから数年後のことである。

津波襲来と共に佐々木氏は、その対策に寝食を忘れるように奔走されたが、その合い間に、この記録を残されたと思うと、感嘆のほかない。「災害は忘れた頃にやってくる」と言いますが、津波等が起きた場合の事を日頃から、よく考え、予め備える事が大切である。

現在では、高浜地区でも防潮堤を始めとして、防災施設が整備されて来ているが、これを生かすには、住民の高い防災意識が必要である事は言うまでもありません。

これまで襲来した津波によって失われた数多くの犠牲を無駄にしない為にも、過去の教訓に学んで、明日に生かしたいものである。

かかる意味からも、この記録は貴重なものと言える。

（岩間克男記）

⑧

災害に寄せて

佐々木　栄

幼い頃、年寄達が口避に話していた事に、一日の日当は白米一升分（一円五十銭）働けば良いその時代「大地震の後には津波がくる。そしたら高台に逃げろ」「強い雷の時には桑の木の葉をかぶり、高い木の下には行くな」と。今日では情報がすぐでますが昭和初期には親とか年老いた人達の云う事を信頼したものです。明治二十九年の大津波では高浜部落でも死者や怪我人、家屋の流失等被害があったと聞かされ恐ろしさを感じたものでした。

大地震があっても津波がなかったこともあり信頼できませんが明治二十九年、昭和八年とも節句の時来ております。上下の揺れは津波が来ると云われ、私も小学三年の春、震度五くらいの地震を体験しましたが祖父母が「上下揺れだから津波が来る。高い所に逃げろ」と云われ学校道具、寝巻を持って逃げたが地震後二十五～三十分位で第一波が押し寄せ、それから十五分位で第二波が来襲した。この津波前は、出崎浜と云う現在の第二水門前から津軽石川河口に向け幅八十メートル、延長九百メートル位の砂浜が突き出て、そこには松林やハマナスの群生があり海も奇麗で高浜の天の橋立と称され、出崎の内側湾洞には杉丸太で作られたカキ筏が浮かび、夏には三区水門のある岡の浜から上級生と共に猫泳ぎで出崎浜まで泳ぎ、ハマナスの実を食べながら戻った思い出があります。

昭和八年三月三日一緒に波を見に行った祖父若松じいさんはテンマ舟（今の和船）に乗り込み沖に出て行きました。まだ暗い午前三時三十分頃と思います。高さ十メートル位と考えられない大波で青い火を吹いて打ち寄せて来たのを目のあたりに見たのです。その時です。出崎浜の先端にあった造船所、鰯の加工場小屋に泊っていた男女五人が提灯・ガス灯をつけ浜を渡り逃げたのですが途中大波に呑まれ四人が死亡し一人は流れてきた舟に乗り助かったのです。

その後、祖父に危険と思ったら舟に乗るのだ。浮き物に乗れば助かると教えられ、年寄りの教訓をしみじみ感じました。

昭和三十五年五月二十四日、地震もなく襲来したチリ津波は二日で太平洋を渡り、高浜部落の百八十戸中三十戸流失、二十戸浸水、金浜で一人死亡と云う惨事を引き起した。その後、四十三年五月の十勝沖津波では海苔・カキ養殖施設に大被害を被っている。

その後、高潮防波堤の完成により安心して暮らせるようになりましたが、これまでの惨事は決して忘れ去ることはできず、今後語り継ぎ、後世に残したものです。

⑨

津　波

岩　間　徳右ヱ門

昭和三十五年五月二十四日、前の日田植えも済んでぐっすり寝込んだ朝方、かすかに聞こえるざわめきの音に目覚めて表に出て見ると、まだうす暗い道路の上を外灯の灯りで無気味に光った水が畑の中に滝となって落ちて居るのが見えた。「おっ、これは昔の人が云ってた津

波だ」と、とっさに思い何の前ぶれもない津波におどろき「津波だ、起きろ〳〵と家族の者を起こしたが、地震もしないので、只慌てるばかり、水はすぐそこまで来ていた。やっとたどりついた山の上から見た時は、一波らしい波は、家の裏十五米位で止っていた。空も大分明るくなって来た。沖を見るとものすごい勢いでうねりを立て乍ら入って来る潮の速さ。赤前、津軽石、金浜と見る〳〵盛り上り、ゴーゴーバリ〳〵ドカン〳〵とすごい音をたて乍ら金浜の方向から波が盛り上がって来る。八幡山の崎で遮ぎられて、尚以上盛り上りを見せる。避難している墓地の山麓で二米五十センチ以上もありそうだ。忽ち付近の家も浮き上がった。「あっ家が動き出した」五、六日前に杉皮屋根を瓦屋根に変えたばかりの我が家の座敷の方が浮いて台所は地についていた。潮が引きはじめ、流れて行く舟が見えたと思ったら目の前を潮がすごい勢いで濁流となって、ガバッと一気に家や木立を引きずりおとして行った。あっという一瞬の間であった。あとには山岸にわずかに芥ばかり、家のあった所は土台石ばかりで木立の一本も残っていなかった。「ああ駄目だ」からだ中の力が抜ける思いであった。

海辺に生活するには地震がすると津波が来るかも知れないと心の準備もするが、地震のない津波には何をどうすればよかったのか、来る日も来る日も夢中で浜に出て流れた物をさがしたが、満足な物は無かった。それでも自分の家の印のある者は食器のふたでも持ち帰った。

大きな災害であったが人命に悼みの無かった事が朝方の明るかった為で、それが救いであった。当時もっと早急な報道が出来なかったものかと考えさせられました。

⑩

チリ地震津波を振り返って

岩間　キクエ

その朝、四時三十分頃だったと思います。外が賑やかなので、起きて外へ出て見ました。南隣りの中島さんの家の方でした。海の水が、中島さんと、米沢さんの間の道路まであがって来て、引いていった後でした。

海を見ると、流れも速く、物も流れていました。空は、気持ちが悪い独特の色をしていました。これが津波だと直感して、家に走って帰り、子供達三人を起して、「海の水が速いから本家（佐々木弘一さん宅）に行くべす」と言って大しもさんへ向かいました。行く途中竹林そねさんが、縁側の雨戸を開けていました。「どごさいぐす。まだ暗えがもどっていって寝どがんせえ」と言われました。小さな子供三人を連れて朝早く歩いているので不思議に思った事でしょう。それで「あのねんす、海の水がすごく速くておっかねえのんで大しもさんさ避難しに行ぐどごでごぜえんす」と言ったら「津波はこねえが。どっからくるって、地震もすねえもの」と言われましたが、それでも海の様子がいつもと違うので、急ぎました。大しもさんはまだ寝ていたので、「起きどがんせ、早くおぎどがんせ」と言って戸を叩いて起しました。私は三人の子供を預けて又、何か一品でもと思って家に戻りました。結局、毛布二枚を持っただけでした。大しもさんに又戻ってやれやれと思っていた時、夫の乗った船が見えて来ました。夫は前の晩、はも漁に出ていたので、海の上だったのです。私は「高浜には船は付けられねえ、潮が速くて」と叫びました。船は宮古の方へ行ったかと思ったら、又戻ってきて、すぐ又、沖の方へ流されて行きました。大きなカキ棚といっしょで、木の葉のようでした。海の水がどんどんと増して来ました。私達は、弁天様の広場に登って避難していましたから安心でしたが、何回かの引き潮の後で湾内がいっぱいになりました。その時の海の水の音はバタバタなのか、ビジャビジャなのか分からないような音がしていました。海の水が増して来たと思ったら、あと浜の方から家が流れて来ました。その速さは、大きな船が全速力で走っている位だと思いました。そのすぐ後には、高浜の家も流れました。私の家は、家の高さの半分位まで水があがると浮き上がり、くるくる廻り乍ら流れ出しました。その後、ぐんぐんと海の水が引いていきます。その引いている時、金浜の船が二隻出てきました。その時、白浜の方から水がいっぱいになり、しぶきをたてて海の口をあいて進んできま

した。引いていく水と沖から来る水とがぶつかりました。その瞬間金森さんの船は呑み込まれて見えなくなりました。この時、大田の浜の方には、水が多く、高浜の方には水がなくて大田の浜の方へ行った船は助かりました。本当に津波の水は生きているようでおっかないものですね。

あとかたづけが始まりました。かたづけていると、佐々木富右ヱ門さんの礼子さんがパンを持って来てくれました。それまで食べることなど考える余裕もなく働いていました。夫が帰ってきて「生ぎったあな！」と言いました。「頑張っていだあよ、お前さんが船でいったりきたりしているのを見でいだあよ」と言ったら「おれはなあ、高浜の様子を見べえと思って行ったら長五郎さんの家が流れて来てさ、一人あげ、二人あげ、三人あげ、全部で六人船にあげだあ、」そして高浜の方はなあどだあべえねんすど聞いたら、なあに高浜の方は先に流れだあねんすと言われだあ、おらが家はだめだあど思っていだあ」といいました。その後、家族全員が死んでいたら、もう家は建てないと自分一人船に住む覚悟をして来たそうです。幸いにも全員無事で再会することができました。本当に無事でなりよりと思ったものです。

⑪

津波の思い出と感想

岩　間　栄　一

『大地震の後には津波が来る、地震があったら高い処に逃げろ』と昭和八年三月三日の三陸大津波の後に石崎鼻に昭和九年五月磯鶏村で建造された三陸大海嘯記念碑には書かれています。これは私にとって忘れられない思い出の言葉です。我が家は代々漁師であったせいか、明治二十九年の三陸大津波には先代の女の人が。又昭和八年の三陸大津波には私の父と父の弟と二人亡くなって居ります。その後、私の弟も海で亡くなると云うことが重なり私は「陸で働いてほしい」と云う母の願いにより国鉄に四十年勤務し定年退職、現在に至っております。

昭和八年三月三日未明に起きた大地震（強震）で、はね起きた私は当時小学校五年生でした（以下次男三年生、長女一年生、次女六歳と三女は生後三ヶ月の五人）既に起きて居た母や祖母に、「こんな時には津波が来るかも知れないから、チャントモヨッテ学校道具を持つ」ように云われました。又、大昔の大槌の鯨山まで上ったそうで今でも鯨の骨が出るそうだ、どこまで来るかわからないから裏山に逃げるようにとのことでしたが、そのまま寝床で休みました。数十分後『津波だあー』と叫び乍ら来た人がありました。見ると前田のお父さんでした（当時、岩間利助氏の家は海辺にあり、そこから出崎と云って幅二、三十米位の砂浜が赤前方向にむかって約二百米位突出て居りその先端に造船所があり、数人の方が泊まって居た。）私どもも急いで裏山に逃げました。雪が積もっており寒い朝でした。出崎の方を眺めて居ると造船所の方から陸に向って走って来る灯が見えました。ゴウ〳〵と云う音と共に高い波が押し寄せ途中で波に呑まれ灯も消えてしまいました。波も大分、治まったので寒いから家に降りて来るように云われ、来ていると、避難された方達で、家の中に入れきれず、庭には三ヶ所に焚火をして、素足の人や下着だけの方も居りました。午後になって父の死を聞かされました。

チリ地震津波は昭和三十五年五月二十四日でした。午前三時半ごろ妹が子供三人と大きな風呂敷包みを持って来て、起こされました。「津波が来た。一回目は来たが今、潮が引けて行ったので大きいのが来るかも知れないから手伝ってくれ」と云うので、盛合惣蔵家に行きました。濡らしては大変と云うので二階に上げて居ると波が来たと云うので見ていると、黒い波が唯「ノコ〳〵」と押し寄せて来ました。豚が流されると云う声で豚小屋に行き豚をリヤカーに乗せて引張ったのですが波に追い付かれたので、そのまま置いて逃げました。道路（現在のバス通路）の方を見ていると、佐々木豊治さんが「ノリサッパ」に肥料を盛んに積込んで居りましたが、波がどんどん増えて流され始めたので諦め、西国順礼塔に登った時、波は益々勢いを増し西国順礼塔の上を越えたのです。危いから早く逃げるよう大声で叫びました所、逃げた瞬間に西国順礼塔は倒れたのです。豊治さんは特長を履いて居

り胸まで波につかって流れ墓地道路に近づいた所を引上げました。引導場に上り眺めた所、棟までつかった家々は「ポッカリ」と浮び、あっと言う間に流されて行きました。幸いにして当部落には犠牲者は無かったのでしたが、一瞬にして家や財産を流された方々は誠にお気の毒でした。津波の騒動も一段落着き、当時部落会長だった小山根（佐々木惣蔵）さん方では、次々と来る救援物資を座敷一杯に山と積まれ、罹災を受けた方々に分けて居られました。何もかも失った方々は大変有難かった事と思われます。今は高浜地区もすっかり立ち直り各々の努力により各家とも立派に生活をして居られます。

チリ津波三十周年を迎えるに当り当時のことを思い起こし各地の災害や被害の情報に耳を傾け社会活動を通して救援や奉仕活動に協力するよう心掛けて行きたいと思って居ります。

⑫

三十年前を思いおこして

佐々木　保　衛

昭和三十五年五月二十四日、夜が未だ明け切らぬのに戸外で何やら騒ぞうしい話声と、慌ただしい人々の足音がするので、外に出て見ると浜手の人達がせっせと家財道具を運んでいるのが目に入った。「ナンダーエ、ナニがあったーのすかー」と声を掛けたら、「悪潮ダアが、ヨダ、ダアもんだーが、大水で家の中は水浸しダアデバー」と云い乍ら忙しそうに立ち働いているので、それではと思い浜の方に下がって行ったら、もう国道から下手は一面の水である。これは大変なことだなーと考え乍ら国道沿いに湾の方に向けて足を運んで見たら、現在の地区センター附近から南の方は道路だけを残して人影は無く、辺り一帯の家々は床上まで浸水していて、山手の高台から避難した人々の話し声が聞えていた。湾内に目を向けると海水がどんどん水嵩を増して行く様が見え、周囲は霧を含んだような冷気が肌に感じられナントも薄気味が悪い思いがした。これは何かが起きるぞ、このままでは危険と思い急いで近くの八幡様の山によじ登り湾内を見渡すと、湾奥から引く潮と沖の方から押し寄せる波で水位を増す一方だったが、間もなく小学校（現タカラ会館）の前海で四、五米はあろうかと思われる三角波となり、陸地を目がけて突っ走って来て、学校と道路を隔てて建っていた関川米屋さんを襲い、もの凄い音響と共に一瞬のうちに押し倒し、電柱等がバリ〳〵と折れる音が耳に入るし、陸地は大洪水の様相を呈し附近の民家は忽ち水に没してしまい、水位が軒下に達するようになり、あっちの家、こっちの家とグラ〳〵揺れ動き、奔流に押し流され次々とあらゆる構造物を轟音と共に将棋倒しにして行く。又一方では沖に向かって疾風の如く押し流されて行く家の屋根が見えたり、まさに地獄絵を見るような惨状と化したのである。ハッと吾にかえり、我が屋のことも心配になり、更に山を登って見渡すと、こちらの方は未だ水嵩はさほどでなく、逃げ惑う人影が疎らに見られた。自分が出掛ける時未だ床の中にいた子供達の事が気掛りだったが、あの大波ではどうする事もできず、居ても立ってもおれない心境で時を過ごしていた。小康状態となったのを見て山を下り自宅の方に向ったら、途中の高台に全員無事避難していたのを確めホッとしたものだった。又幸い我が家は畳が濡れる程度の浸水に止どまったが、家の前には小舟（サッパ）や流失物の山が出来ていた。

この様な災害がどのようにして起こったのか、その後の報道等で知ったのだが、地球の裏側のチリで発生した地震津波によるものと判り、身体に直接感じる地震が無くてもこの様な大災害をもたらすものだと、海辺に住む者の今後に対する大きな教訓を得たと思う。

三十年を過ぎた現在では記憶も薄れてはいるが、あの惨状を見て、敢えて拙い筆を取りました。

⑬

昭和三十五年五月二十四日

岩　田　ア　イ

ドンドンドン「アツコ姉さん津波だ早く早く」叔母の声にとび起き自分の目を疑った。庭一面の大水、それがどんどん押し寄せ見る見る

うちに縁側にせまって来る。「大変だ早く子供達を」をあせる。仲々鍵が開かない「貴重品、それからそれから」頭が混乱し、手近の着替えを包む。膝上までの水の中を子供達と裏山に登る。近所の人々も続々登って来る。皆唇が白く声がふるえている。「実家の父は、弟妹は」いても立ってもいられない、「あっ来た」皆丹前姿だ。波に追われるように山にはい上る。眼下は今はもう道も畑も呑み込まれ、小学校も二階しか見えない。おおきなラワン材がすごい速さで流れて来る。「ドーンドンバリバリッ」次々に家が浮き上る。「あーっ家が流されるー」皆大声で泣き叫ぶ、今はもう悪魔と化した巨大な濁流は、つい数十分前まで平和で美しかった村のほとんどを家諸共何十年間貯えた家財も思い出も一瞬にして黒い海の底に呑み込み引きさらい一面の廃墟と化してしまった。信じられない光景に今は皆茫然と立ちすくみ、やがて静かに絶望の涙を流した。異常に寒い。茫然自失の私達被災者に立ち上がる力を最初に与えて下さったのは、高台で被害にあわない親戚及び近所の方々の温かい援助と励ましであった。皆二世帯も被害者を受け入れて下さりどんなに嬉しく心強かった事が、今改めて感謝の気持ちで一杯である。又親戚や知人友人の方々の真心のこもった見舞いの数々、励ましは一生忘れてはならない事である。

河南中の皆さんの奉仕活動も本当に有難かった。全国各地、赤十字等からの衣類・毛布・鍋・食品等の見舞品はどんなに助かった事か頭の下がる思いであった。宮古の小百合幼稚園で頂いたブルーのガウンと同じ色の目をした神父さんの笑顔も忘れられない。この時私は助け合いの有難さと大切さを痛切に感じた。

自分達の事で精一杯だった私達被災者のため尽力して下さった行政、消防団、各要職の方々の陰の力があって今の高浜の発展があると感謝している。

⑭

津　波

岩　間　芳　子

小さい頃から私は父の語る津浪の怖さを聞いて育ってきました。何回も何回も、ことあるごとに聞かされました。

明治二十九年の三陸大津浪は、父が一歳二ヶ月の時です。その日は端午の節句で、母親と実家である重茂に里帰りした時被災したのです。倒れた残骸の中から、なにか泣き声が聞こえるということで、取り除いてみたら、こと切れた母親の背中で子供だけは命があったという訳なのです。それが私の父だったのです。何日も何日も泥を吐いたそうだと聞かされました。母親の面影も知らず育った父は、寂しい幼年時代を過ごしたんだろうなあと思います。それ故に父は私達子供にも、しっかりと津浪の怖さというものを、心に刻みこませてくれたのだと思っております。

私が体験したチリ地震津浪のことですが、私が高校二年の時でした。ちょうど一学期のテストの最中でしたので、一夜漬けの勉強のため午前二時すぎ迄おきていました。静かな静かな朝方に、ノソッ、という無気味な音を聞いたのです。それは音というより、詳しくいえば「感じ」だったと思います。その時間に起きていた私だけが感じた体験だと思っております。異変がおこる前ぶれの何かだったんではないかと思います。

高台に逃げ、ゴーゴーと地の底をえぐるような無気味な音を聞き、一瞬にして畑や木、道路、家々が浪に呑まれていく様子を見た時はこれが地獄そのものだと思いました。

「津浪は必ずくる」ということを肝に命じ、後世に語り伝えていくべきと思います。海岸近くの低地に居住する人たち、又漁業関係に従事する人の多い高浜地区は、被害を最小限度におさえるようにしたいものです。最後にもう一度言いいます。『津浪は必ず来る』と。

⑮　当時の子供達の作品より

津波のこと

斉藤優美子（旧姓岩田）

私の住んでいる高浜にはか、海岸ぞいにりっぱな堤防が建てられて

います。この堤防は、長さ約六、五〇〇メートル、高さ六メートルというりっぱなものです。その一部は、国道四十五号線にもなっており、幅広い舗装された道を、何台もの自動車がすべるように走っていきます。この堤防を見ていると、あのおそろしい思い出が思い出されてきます。

チリ地震津波……それは、私がはじめて出会った災難でありました。それだけその恐ろしさが、今でもはっきりとよみがえってくるのです。

忘れもしない、昭和三十五年五月二十四日午前二時五十分のことでした。

その夜、学校の教師をしている父は、宿直で留守でした。母と妹と私の三人は、いつもより早めに床につき、いつしかねむりに入っていました。……と、やがて、ドンドンと戸をたたく音、外のさわがしいざわめきが、夢のように感じられました。そして、とつぜん「津波だ。」という母のこうふんした大きい声がすぐ側でひびき、私と妹はびっくりしてとびおきました。

わけもわからぬまま、あわてて妹といっしょに外に出ると、すでに、すぐ前の庭まで、波がひたひたと押しよせてきていました。私は、まだ津波がきたということが信じられませんでした。私と妹はその時知らせにきたみのえおばさんに手をとられ、近くの高台にあるおばさんの家に避難しました。母はやはり、かけつけてきたおじさんたちに手伝ってもらって、家具などを運び出すため、家に残りました。

おばさんの家に避難したものの、まもなく、大波がくるという知らせがあり、おばさんのうちでは波がくる心配があるので、私と妹は、みのえおばさんに連れられて、すぐうしろの小高い山に避難しました。そこには、母の実家のおじいさんや、おばあさんたちが、たんぜん姿で立っていました。そして、そのほかにも、小学校の校長先生一家や、近所の人たちが、避難していました。みんな、寒さとおそろしさで、わなわなふるえていました。みんなは、ぼうぜんとして、眼下の自分の家のようすや、近所の家のようすなどを見守っていました。空はふしぎに薄明るく、その下に、道に、畑に、家におし寄せて来る波が見えました。しかし、それは、大きなうねりではありません。潮が満ちてくる時のように、静かに、確実に、それは、水かさを増し、どんどんおし寄せてくるのでした。風が気味悪いほど激しく吹き、ほおに冷たく感じられました。

私は、下の様子をながめながらも、母のことが気がかりでたまりませんでした。心細くてしかたがなかったのです。いつのまにか、妹の手をかたく、にぎっていました。やっと母がもどってきました。私は、ほっとしましたが、その顔は、気持ちの悪いほど、青ざめておりました。母は、ハアハアと、せわしそうに肩で息をつきながら下のようすをおばさんたちに教えていました。いよいよ、大きな波が襲ってくると言うのです。

みんな、緊張したおももちで、下のようすを見ました。水面よりぐんと高くもり上がった波が近づいてくるのが見えました。波は、近づくにつれて、ぐんぐんふくれあがり、どんどん押し寄せてきました。それは一つの大きな怪物のように、あたりの道を、畑を、人家をのみながら、だんだんこっちへせまってきます。夜明けの冷たい空気の中で、波のものすごいザーという音だけが、あたりに轟きました。私の家が水につかりました。あっという間に屋根だけしか見えなくなりました。

私は、いつ流されてしまうかと思って不安でなりませんでした。続いて、おばさんの家も水につかりました。メキメキ、バリッというすさまじい音がして、一軒の家が、とつぜん、浮き上がり、傾き、そのままどんどん流されていきます。続いてまた別の家が……。そのたびに、まわりから「ああっ」という悲痛な声がもれました。私たちは、とても信じられないような気持ちでそのおそろしい光景をじっと見ていました。それは、まさに地獄のような光景でした。

家は、次々にこわれ、浮き上がり、どんどん沖へ流されていきます。材木など浮かんで、うずをまいているおそろしい波が、押しよせてくるのです。私が来年の春、入学する小学校も、二階だけがちょっぴり見えただけになり、すっぽりと水の中につかりました。そして、つい

昨日までのって遊んでいたブランコも、すべり台もドンドン流されていきます。

悲痛な声がやがて、すすり泣きに変わりました。そして、すべての希望を失ったかのように、その場で泣きくずれていました。今まで、みんなが苦労を重ねて築きあげてきた財産がこのいっしゅんに、水のあわのように消えてしまったのです。どんなにくやしかったでしょう。残念だったでしょう。それ以上に、おそろしさのあまり、何も考えることができず、ただただ泣きたい、泣かずにはおれない気持ちだったかもしれません。

このチリ地震津波は、各地に大きな被害をもたらしました。その被害は、次のように、おどろくべきものでした。

死　者	一
家屋全壊戸数	二二
流失戸数	七七
半壊戸数	六六
罹災世帯数	七二九
被害総額	一〇億円

（宮古市役所発表による）

この恐怖の一夜が明けると同時に、うそのように波もおだやかになり、昨夜のことが、悪夢を見ていたのではないかと思われました。夢ならさめてくれ。昨夜のことが夢だったら、どんなに神に感謝したことでしょう。

しかし、やはりそれは、たしかにあったことでした。ぬぐおうとしても、ぬぐい去ることのできない、みじめな現実でした。波は静まっても、昨日までのあのおだやかな遠浅の美しい海は、にごったどす黒い海と化していました。また、部落のようすも、昨日とはうって変わって荒れはてていました。道路はめちゃくちゃに破壊され家の破片である板や柱が山のように積み重なっており、畑は、ドロとゴミの山になり、今まで、建ちならんでいた家は、流されてあとかたもなくなったり、屋根と柱だけになったり、押しつぶされて板や柱だけになり、見ただけで、なさけない気持ちになりました。たたみや床の上には、ドロが三十センチもたまっており、まったくうんざりする思いでした。

小学校の校舎は、ドロだらけになって少し傾き、窓という窓、ドアというドアはなくなり、机や椅子が散らばりほうだい散らばっていて、まるでお化け屋敷のようなありさまです。こんな死んだようになってしまった部落を見て、初めて、実感として、津波がきたことを感じました。津波の恐ろしさを感じました。

それから部落の人々は、あとしまつに、家の再建に立ち上がりました。あまりのむごたらしさに、ぼうぜんと見とれていた人々は、やっと生きる気力を持って立ち上がったのでした。市内のほうぼうからも、男の人や、おかあさん方、高等学校や中学校の生徒の方々が、作業にかけつけて来てくれました。明るい五月の太陽の下で、家についたドロを洗いおとしたり、材木などをかたづけたり……。ふだんの静かな部落とはちがった。活気にあふれた部落に一変しました。部落の人たちはこの多くの人々の勤労奉仕に心から感謝しておりました。この人々の誠意、善意から、部落の人々は、立ち上がる気力を得ることができたのでしょう。

また宮古の人々だけでなく、全国の見ず知らずのたくさんの方々からも、暖かい善意の手がさしのべられました。救援物や見舞金などが、送られてきました。それは、部落の人々にとって、精神的にも、物質的にも、どれほど力強い支えとなったかわかりません。うちの父や母も、ありがたいものだとくり返し言っておりました。

このような、たくさんの人々がかけつけて下さった大がかりな作業が、一週間ほども続きました。それでも、住むことができるように、かたづくまでには、そうとの日数がかかりました。私の家族は、母の実家のおじいいさんたちといっしょに、あまり被害のなかったおばのうちに、お世話になりました。不自由でも、にぎやかな生活でした。やっと、もとの自分たちの家にもどることができたのは津波の日から一カ月後のことでした。

現在、私の家は、海からずっと離れた高台の上にあります。もとの

場所は、同じようなひどい目に会うおそれがあるので、家を移したわけです。前の場所と比べると、急な山道をのぼらなければならなくなったし、バスの停留所まで遠くなったりして、不便な点もありますが再び恐ろしいめに会うよりはましです。それに、今年の春、増築したので、前の家より、ぐっと大きくなったし、明るくなりました。私の部屋は、二階なので、晴れた日には、東向きの窓から高浜の部落全体が、静かな湾内の海と、美しい月山を背景に見渡すことができます。ほんとうに一枚の絵のようです。

高浜小学校も、もとの場所から、金浜部落に近い、高台に建ちました。木造だった前の学校とは、めんぼくを一新して、鉄筋コンクリート二階建ての堂々たるものです。屋上に上がれば、そのながめはすばらしいものです。校庭も前の学校の時よりぐんと広くなりました。

前の学校が建っていたところは、日産農林というベニヤ工場ができて、そこに働く人たちが、高浜に住むようになりました。海の近くにあった家々も、次々に、山手の高台に場所を移しています。新しく建てたり、改築したりで、高浜全体の家々が、前より明るく近代的になりました。

このように部落は、その様子を変えていきましたが、津波から二年後の昭和三十七年に、海岸線にそって、高さ六メートルもある、りっぱな堤防が完成しました。宮古湾内を包むよう道路にそって続いている堂々たるものです。さらに国道四十五号線の舗装工事が始まり、急だった坂道はけずりとられてゆるやかな勾配になり、狭かった道は、ダイナマイトで広げられ、まったく見ちがえるようなハイウェイになりました。ただ、海だけは、いぜんと変わることなくノリシバが立ち、カキダナが浮かび、小船が行ったり来たりしています。

あのチリ地震津波の恐怖が、うそとしか思えないようなきょうこのごろなのです。

（昭和四十二年読売つづり方コンクール県一位）